

第10回銀華文学賞発表

銀華文学賞

当選

「加熱炉」波佐間義之（福岡県中間市）

特別賞

「凍裂」高岡啓次郎（北海道苫小牧市）

河林満賞

「梱包の方法」室町眞（東京都杉並区）

歴史小説特別賞

「鎮遠自沈ならず」

吉田満春（千葉県山武市）

※予選選考に当たり、小林広一氏、中野睦夫氏に多大な御協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

銀華文学賞はおかげさまで一〇回目を迎えることができました。今回もまた日本全国およびアメリカ、インド、フランスなど海外からの作品を含め、四一九篇という多数の御応募をいただきました。心から御礼申し上げます。
予選選考を経た作品の中から、大高雅博・八覚正大・小沢美智恵・小浜清志・都築隆広・五十嵐勉の選考委員による厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。昨年と同様歴史小説賞も継続させていただきました。
また御遺族の御厚意により河林満賞も併せて選出させていただきますました。

誌面の都合により、奨励賞などの作品は五〇号以降に順次掲載させていただきます。

第一〇回銀華文学賞授賞式・祝賀会および懇親会は、二〇一四年一月二十五日（土曜日）午後二時より東京の大田区民プラザにて「文芸思潮」エッセイ賞／現代詩賞／イラスト・漫画賞といっしょに行なう予定です。どなたでも御参加可能ですので、どうぞお誘いの上御来場ください。

第一一回銀華文学賞も本年とほぼ同じ要領で行ないます。皆様の御応募を心からお待ちしております。

優秀賞

「1969年・理英子と」

竹内 清（愛知県刈谷市）

「雨の愛子」豊岡靖子（京都府長岡京市）

「負の気配」渋谷江津子（青森県弘前市）

「沖縄の叔母さん」

佐藤多美子（鳥取県米子市）

奨励賞

「幻想が生の実在を」佐山広平（愛知県春日井市）

「白富士病院」きなりかず（長野県松本市）

「熾火」椿山 滋（大分県中津市）

「父はひとりで」國方 學（愛知県名古屋市長屋市）

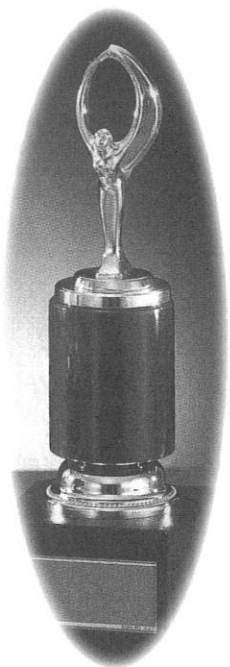
「さらさら とけい」出井孝子（滋賀県長浜市）

「獣魂碑」美里あきら（大阪府大阪市）

「平和公園の叢のかげで」梶川洋一郎（広島県広島市）
「ある遺書」原石寛（神奈川県横須賀市）
「眼科病室の患者たち」前岡光明（東京都町田市）
「罪」土岐田耕（大阪府豊中市）

歴史小説奨励賞

「アリラン恋歌」北見 舜（大阪府堺市）
「栗栖野」北条かおる（京都府京都市）
「東雲白むまで」伊野里健（千葉県白井市）
「水の中の笑い声」木山省二（東京都板橋区）



一〇周年を記念して当選作・特別賞作品・歴史小説特別賞は文芸思潮Eブックに電子出版させていただきます。

佳作

- | | | | |
|-------------|--------|----------------|----------|
| 「GUITAR」 | 戸澤洋二 | 「舎似道」 | 吉田宏子 |
| 「折り目」 | 河津四方 | 「二十日鼠も少年も」 | 三村榮一郎 |
| 「彼岸花」 | 宇和静樹 | 「ワンチャン・パトロール」 | 清水耕一 |
| 「安芸書林」にて」 | 木下訓成 | 「未必の同意」 | 成瀬健太郎 |
| 「秋桜の咲く場所」 | 鴻江美和子 | 「ひとつの風になれ」 | 古川サト |
| 「われらしゃべり隊」 | 大隅 洋 | 「二人旅」 | 飯島もとめ |
| 「レモンの渴き」 | 坂上弘之 | 「合作」 | 神通明美 |
| 「蜜柑」 | 来の宮あんず | 「寒夜」 | 星野 透 |
| 「鱗」 | 福野 泉 | 「もちろんっその通りですが」 | 小野友貴枝 |
| 「スクール」 | 古林邦和 | 「動かない海」 | 関野みち子 |
| 「夢先案内人」 | 冴樹悠也 | 「保釈」 | 窪川龍二 |
| 「闖入者」 | 本松秀茂 | 「草庵の恋」 | 牧 作樹 |
| 「あの夏のあの日」 | 山崎文男 | 「父の日記」 | 中川一之 |
| 「ソウルで姉妹は見た」 | 栗山佳子 | 「結界」 | 川津圭介 |
| 「宇治しぐれ」 | 小川ナツ | 「ぬけがら」 | 王峰 |
| 「生命の芽」 | 上田 勝 | 「遅い日没」 | 小林理樹 |
| 「何故の木」 | 横井直高 | 「いのちの記憶」 | 国方 勲 |
| 「紅雨」 | 井 美和子 | 「手首の記憶」 | 木村令胡 |
| | | 「かたくりの花」 | 宮下ゆう希 |
| | | 「焼かれる処女嫁」 | 李耶シャンカール |

選評

言語表現の完結性

小沢美智恵



候補作の審査をするにあたって、それぞれ個性のちがう小説家が論議しはじめると、その文学観の多様さに驚かされる。ある選考委員が満点をつけた作品を、他の委員はまったく認めないということもよくあり、なかなか意見の一致を見ない。最後は多数決にしようとしても、この文学賞は委員が六名と偶数で、賛否が真っ二つに分かれたりして難儀した。

その末での決定である。文学賞というのは、当選作が候補作の中で最良の作品だとはなかなか言えないものだが、今回はとくに最後まで決まらなかった。

紆余曲折して当選作となったのは、波佐間義之「加熱炉」である。製鉄所の現場にリアリティがあり、とりわけ「丸めたウエスのような物体」が溶鉱炉に落ちて、「ボンと弾ける音を立てたかと思うと煙とも蒸気ともつかぬ白いもの

歴史小説賞佳作

- | | |
|-----------|--------|
| 「遣唐大使 道真」 | 杉本敬治 |
| 「山梨の花」 | 大森耀平 |
| 「上山宿始末」 | 小笠原 新 |
| 「おそらく」 | 谷 光洋 |
| 「月照に会いたい」 | 興膳克彦 |
| 「日米和親条約」 | 白井 康 |
| 「永代橋異聞」 | 中川ひぐらし |
| 「黒雲の天空」 | 笠置英昭 |
| 「遊び人の恋」 | 小竹康二 |
| 「太閤秀吉を討て」 | 春藤 弦 |
| 「芙蓉之間の忠臣」 | 久保協一 |

童話賞佳作

- 「イヤーチャップマンの小さな靴」 大川内聖二
「シューメーカー 靴の修繕やさん」 いまだまりこ

を激しく上昇させ、すぐに光線に同化するように消滅」する場面など緻密な描写でよく描かれている。ウエスと見えながらも実は人間で、それが事故なのか殺人なのか、謎を残したまま物語は進んでいくのだが、言葉だけで「本当らしさ」を積み上げていく前半の緊密さが、後半やや緩んでいるところが残念に思われた。が、作者は、製鉄所の労働環境を知らない読者にも、下手に自分のミスを認めれば一生浮かばれない組織の仕組みを納得させ、目の前に熱く溶けた鉄の塊を現出させた。これは言語表現が読者にもたらず内的体験だろう。

特別賞の高岡啓次郎「凍裂」は、仕事と家事と介護で疲れ切った主婦が、自分が通報したことで逮捕された無実の男のもとへ走る話である。徐々に凍りついていく主人公の内部が、ついに破裂する過程が無理なく描かれていて、鮮やかにタイトルと呼応した。候補作中いちばんのまとまりを見せた作品だが、無実の男がなぜ指名手配されながら何年も逃げていたのか等、ふと疑問にとらわれる箇所があって、作品の「本当らしさ」が損なわれる面があった。

河林満賞の室町眞「梱包の方法」は、父の不倫が心に影を落とし、いまだ人生を上手に過ごすための方法を見つけ出せずにいる「僕」が、文学青年だった十九歳の頃を思い出す話である。女友だち・茉莉とアルバイト先の黒メガネの店主が自分を求めていたにも拘らず応えられなかった苦

さを持ち続け、自分の生涯にわたる生きにくさがどこに端を発していたのかを探り当てる。

同じように文学青年（少女）だった過去の回想を核に主人公の人生を語る作品に、佐山広平「幻想が生の実在を」、丸山史「胸の洞」があった。いずれも力量ある作者で、作品そのものも悪くなかったが、話の「梱包」のしかたという点で室町氏に軍配が上がった。

それにしても、今回応募作を読んでまず思ったことは、回想ものが多いということだった。そもそもこの賞は、「人生経験豊かな壮年・熟年・シルバー世代の文芸創作活動に光を当てたい」という思いから出発しているから、過去に目が向けられることは自然と言え言えるのだが、そこで留まっていた方がいいのかという思いがたえずした。

たとえば円地文子の名短編「花喰い姥」は、同じく文学少女だった主人公の回想を軸にしているが、高齢になり何もかもおぼろになった主人公の現在が幻想的作風で描かれ、作品内部の事象はいかに「事実」に似ていても、事実とは異なる次元に読者を誘い込む。そこには、単なる回想では終わらせないという作家の強い思いが感じられる。先の三作者も力量は充分にあるのだから、そのもう一歩先をと奮闘してほしい思いが残った。結果的にうまくいかなかったとしても、その意志が感じられるとき作品は輝くのではないだろうか。

優秀賞作品はそれぞれ傷もあったが、捨てがたい長所もあった。佐藤多美子「沖繩の叔母さん」は、叔母さんの正体を明かすタイミングが巧みで、かつその姿が生き生きと描かれていた。豊岡靖子「雨の愛子」は、レイプ被害の後遺症がトラウマになった過程に説得力があった。竹内清「1969年・理英子と」は、過激派から逃げてきた元恋人の身勝手さに魅力があった。渋谷江津子「負の気配」は主人公のあつけらんとした語り口がいいという委員がいた。

惜しくも優秀賞には残らなかったが、北条かおる「栗栖野」は、実生活の重みを見聞して己の空想の和歌を恥じ、山里にこもる男の話で、芸術観として考えさせるものがあった。

井出孝子「さらさら とけい」は、働き者の女の幸福な一生の物語で、関西弁のリズムが心地よく、語りが巧みであった。

きなりかず「白富士病院」は、身内に生きることを望まれている高年齢者を看取ることで、医師の胸にきざした命への想いが描かれており、高齢化社会の現代における優れて重い問題提起になっていると思われる。

木村令胡「手首の記憶」は、戦争中過酷な目に遭い、精神を病んで自死した従軍看護婦の話で、緊密な文章に迫力があり圧倒された。

小説の特徴はすべての表現が言語を通じてなされており、かつ言語をもって完結していることだろう。言語表現による完結性こそ、小説のもっとも本質的な要素だと私は思い、その点を重視したが、いかに書かれているかより何が書かれているかを重視する向きもあり、あらためて文学観の多様さを実感させられた。

河林満賞の創設について

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品は銀華文学賞に応募される小説作品を対象にし、銀華文学賞選考委員によって銀華文学賞選考会において同時に選考され、御遺族の承認によって決定されます。

受賞者には賞状、賞品、記念品、賞金五万円が銀華文学賞授賞式で授与されます。

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」／文芸思潮

さらさら高く、さらさら貪欲に

五十嵐 勉

銀華文学賞も一〇回を重ねて、感慨深いものがある。延べ三五六四人という多くの方に応募していただいたことになる。これらの書き手に支えられて持続できたことに深く感謝したい。



一方で、書き手に対して、目標を提供し、発奮してもらおう成果は、それなりに役割を果たせた気もし、かなりの秀作の軌跡を残せた思いもするが、これが日本文学という大きな山脈の高峰に連なりうるものかという問いには、いささか躊躇を覚える。ただ一つ、自負できるとすれば、第五回の小林和太氏の「後ろ影のない男」が、そこに立ちうるもので、今回転載させてもらった「アブカサンベの母」に、そのいつそう高次の結晶を見る。一〇回の記念として、これも何かの縁と感じる。

しかし、名作、傑作がそう頻繁に出るものではなく、ましてこの文学貧困の商業誌と文壇の体たらくの現状の中では、はるかにましな頻度で秀作が出ていると見るべきだろう。その意味では、一〇回の年輪は、一つの重みを得たのかもしれない。もともと銀華文学賞の発意は、新人賞を若い書き手だけに偏らせ

入選

- 「二つの顔」 蘭 藍子
- 「磯」 岩井延次郎
- 「キー・ウエスト」 渡邊雅人
- 「斜陽の訪れ」 葛岡昭男
- 「夫婦にて候」 高杉治憲
- 「制服」 筑紫 茜
- 「満天の星空が見たい」 大槻武治
- 「山鳩の聞き做し」 大倉克己
- 「光楽寺」 藤川六十一
- 「整理戦線異状なし」 井上理博
- 「天売島の見合い」 田端祥子
- 「いまは恋しい、ケイという女」 佐山雄次
- 「カボチャ極楽」 喜多文秀
- 「父消える」 馬込太郎
- 「蓮城橋」 宮川英子
- 「胸の洞」 丸山 史
- 「邂逅」 天保英雅
- 「フェンスのない屋上」 大江純子
- 「歌うテネシーのじゅんちゃん」 中川ガバチャ
- 「フリーマントルの落日」 安良川健介
- 「切り火」 鈴木無一
- 「クローズド マインド」 長沼宏之
- 「夜光虫」 宮本辰夫
- 「一九七四年、或る画像」 マツイ アキラ
- 「初代国鉄総裁」 ヒミ子
- 「歩いてくる人」 柿沢正志
- 「消えた池」 森 幸夫
- 「穴のあいたボートをください」 くれき さい
- 「生き物たちの宴」 鎖藤千鶴
- 「おかえり」 佐藤由美子
- 「マテリアル・ガールズ」 悠希マイコ
- 「崖下の夢」 関屋 智
- 「妄想の淵」 柳澤 進
- 「遣された絵」 折口 真
- 「癒された病」 細谷 清
- 「タグ」 大島龍彦
- 「思慕」 磯部 彰
- 「漂流」 藤堂勝汰
- 「私たちの罪」 木元智子
- 「ローマ人顔の友人」 黒田直隆
- 「三年後」 渋谷史恵
- 「軍服をマントにかえた男」 ただえみこ
- 「紅い蓮」 林 貞行
- 「今が旅立ちのとき」 山下一子
- 「夕映えの刻」 三村雅子
- 「氷結の夜空に舞う」 秋山よしひさ
- 「雨乞い」 藤代淑子
- 「新しい正義・認知症」 黒沢良子
- 「山田寺からの手紙」 高松洋子
- 「ごめんね」 立花あゆみ
- 「たそがれにかえず」 多紀祥子
- 「その男ZUMBAを踊る」 乾 達也

選評

ている悪傾向への反発であり、むしろ人生経験豊かな、厚みのある書き手に、実りある作品を提出してもらおうというものだった。それは半ば実現したが、半ば不満を残した。持続はしているものの文学的な野心に乏しい側面を、壮年層以上の多くの作家が露出していたからである。五〇枚という制限のなかでは期待するほうが無理なのは百も承知しているが、こちらとしては挑戦的野心や、既成の枠に対する破壊力を期待していたのも事実である。現在の一般誌の新人賞は若い世代でもさらに挑戦的野心は貧困で、破壊力などというものはかけ離れてせいぜい線香花火程度にしかならない現状は、もっと惨憺たる状況だと確かに言える。しかしだからこそ先に立つ世代の牽引力を見せてほしいと願望するのは、無理なのだろうか。学生運動で改革の夢に燃え、ベトナム戦争に反対して叫んだエネルギーは、一時の悪酔いや悪戯にすぎず、文学として結晶し残ることなくただ闇に消えていく無意味な騒ぎだったのだろうか、という疑問や虚しさも抑えることはできない。またそういうエネルギーに代わる立場の野心も存在しないのだろうか、とも思う。銀華文学賞には、さらに高くさらに貪欲に理想を求めていきたい。

第一〇回の節目となった今回は、変化に富んだ題材が揃った高峰に届く抜きん出た作品はなかったが、興味深い題材に取り組む意欲的な姿勢は見るこができた。

当選作波佐間義之氏の「加熱炉」は、製鉄所で働く人間の生の陥穽を描いた作品で、加熱炉の灼熱の舞台上に繰り広げられる

※今回は力のある作品が多かったため、入選として賞揚させていただきます。

- 「消えた池」 森 幸夫
- 「穴のあいたボートをください」 くれき さい
- 「生き物たちの宴」 鎖藤千鶴
- 「おかえり」 佐藤由美子
- 「マテリアル・ガールズ」 悠希マイコ
- 「崖下の夢」 関屋 智
- 「妄想の淵」 柳澤 進
- 「遣された絵」 折口 真
- 「癒された病」 細谷 清
- 「タグ」 大島龍彦
- 「思慕」 磯部 彰
- 「漂流」 藤堂勝汰
- 「私たちの罪」 木元智子
- 「ローマ人顔の友人」 黒田直隆
- 「三年後」 渋谷史恵
- 「軍服をマントにかえた男」 ただえみこ
- 「紅い蓮」 林 貞行
- 「今が旅立ちのとき」 山下一子
- 「夕映えの刻」 三村雅子
- 「氷結の夜空に舞う」 秋山よしひさ
- 「雨乞い」 藤代淑子
- 「新しい正義・認知症」 黒沢良子
- 「山田寺からの手紙」 高松洋子
- 「ごめんね」 立花あゆみ
- 「たそがれにかえず」 多紀祥子
- 「その男ZUMBAを踊る」 乾 達也

犯罪の背後に、一人の労働者の運命が炙り出される構造は、燃え上がるスリルと一体になって、高揚感を醸し出している。罪に堕ちていく溶炉という奈落への畏が、一人の人間の運命への足掻きを描き出している点には結実がある。特に加熱炉という素材には、熱地獄の印象が濃く、その描写が悲劇の熱感を反射させている点ではある程度成功し、迫力を与えている。ただ、副主人公の運命に呑み込まれるその暗い情熱を、溶炉の滾りたつ鉄の赤さに重ねる象徴性がやや足りず、そこがもっと鋭く描かれたなら、いっそう結晶度の高い作品になっただろう。その点が惜しまれる。

灼熱と対極の、氷に象徴される内面の劇を表した作品が、高岡啓次郎氏の「凍裂」である。自分が発見して訴えた指名手配の容疑者が、最終的には無罪になるのだが、その過程で容疑者の母親が自殺する。結果的に彼の母親を自分が殺したことになる罪悪感に苛まれて、苦しさで謝罪の気持ちからその容疑者とメールで文通するようになる。氷解する内面が愛情に変わり、主人公が家庭の不和を逃れて、そちらへ救いを求めていくストーリーだが、北海道の風土に根ざした凍裂という氷の割れる音が心の亀裂と直結しているところにリアリティがある。胸奥が冷たく割れる音は確かに響いてくる。しかし家庭の不和から犯罪容疑者の懐へという飛躍が、作り物めいた危うさを持ってしまっているという弱点もあり、凍裂の心理劇の結節点を評価するか、

弱点を重視するかで選考委員の支持が分かれた。私は「加熱炉」と「凍裂」の二作品を当選とすべきだと主張したが、受け入れられず、特別賞に留まったのは残念である。

河林満賞、室町真氏の「梱包の方法」は、両親の不和からの内面の傷が異性への屈折した形となって、男女の関係を歪めていく宿命を書いた作品だが、アルバイトの店主の男女のドラマと主人公自身の男女の不能のドラマが食い違っていて、成功していない印象を覚えた。前半だけにしほって、自殺する店主の内面劇を深めた方がテーマを掘り下げられた気がする。室町氏の技量はもつと異なった素材に発揮されると見ているので、むしろ次作に期待したい。

歴史小説特別賞の、吉田満春氏「鎮遠自沈ならず」は、注目すべき題材を扱っていて、特に魅かれた。日本人は一般に日露戦争の内容への知識が乏しい。作家や評論家も意外に知らない。まして、日清戦争についてはほとんど歴史の知識を得ていない。ただ「勝った」ことや、李鴻章、下関条約、賠償金くらいのものである。この作品はそういう受け手側一般の知識不足で損をしていた。私自身もこの小説によって清の北洋艦隊の実態と当時の日本海軍の事情を知った知識の乏しさだったが、それらを掘り起こして現代に提示する吉田氏の摘出力は抜群で、私も深く教えられた。日清戦争から日露戦争への日本海軍の変化や清の側の内情は、これまでほとんど顧みられることがなかったように思

うが、その点だけでも賞場に値する。さらに、続く日露戦争でロシアの東洋艦隊が立てこもる旅順港の入口を封鎖してしまう閉塞作戦に、日本海軍が清から鹵獲していた戦艦鎮遠をなぜ用いなかったのか、当時の陸軍の内情を大胆に暴いている点でも、歴史の裏面を見事に別出している。材料が集まりすぎて整理しきれなかった点、山本権兵衛に対する真の評価が不十分であった点、戦国時代や幕末など歴史の華やかな舞台に比べて、日清・日露の戦争をあまりに日本人が知らないことをどう補ってストーリーを展開するかに読み物としての工夫が必要だった点など、マイナスはいくつかあるが、私自身はこの作品が歴史小説賞当選でよかったと思っっている。

毎回優秀賞の層は賑やかでどれに涙を飲んでもらうか苦労するのだが、今回は数が少なかった。「1969年・理英子と」（竹内清）は、学生運動末期の内ゲバと警察の監視下での閉塞生活を描いてリアリティがあり、実体験に基づいた叙述は当時の雰囲気をよく伝えて一つの世界を形作っていた。ただ、逃亡して転がり込んできた女性の父親が府警の本部長という設定は、事実かもしれないが図式的すぎ、やり過ぎる気もした。最後がやや物足りないのは、その後の女性の消息と主人公の方向が曖昧だからだろう。せっかくのリアリティが生きていない結果になった。

「雨の愛子」（豊岡靖子）は、流産した胎児の亡霊が、生

活の中に入り込んでくる話だが、奇妙に亡霊を生動させる不気味な筆は迫真力があり、生々しい存在感を残す。生命の糸を紡ぐ女性の感性が現出させた恐怖世界であるものの、暗闇から折りに通じる方向も感じる。

浪人生に寄せる母性的やさしさを主軸にした不倫を扱っていたのは「負の気配」（渋谷江津子）である。文章にもその抱擁的な丸みが出ていて、包まれるような雰囲気を感じているが、やや短く、何かを書き切っていない恨みが残った。文章のまろやかさは、一つの世界を形作りうるものだろう。その面では魅力を感じる。

「沖繩の叔母さん」（佐藤多美子）は、最後になってほんとうは叔父さんだったという驚きが作品の本質をなしている点で、私は大いに不満を感じたが、他の選考委員たちが強く推奨するので多数決に負けた。私はトリックが作品の中核になっている作品を評価しない。ただうまく騙されたという読後感しか残らないからである。佐藤氏には次回を期待したい。

傷その他不足はあるが優秀賞よりもっと印象に残っている作品は、「白富士病院」（きなりかず）、「獣魂碑」（美里あきら）、「幻想が生の実在を」（佐山広平）、「罪」（土岐田耕）、「鱗」（福野臯）、「未必の同意」（成瀬健太郎）「折り目」（河津四方）である。

「白富士病院」は医療の現場から親子の絆や人間関係の荒

廃を鋭く見つめていて、深い告発性がある。文章が生硬で表現が馴れていないのが惜しまれたが、そのテーマの重さは現代に向けて発せられるべき意義を有している。「獣魂碑」は、精肉店の店じまいを、アフリカの動物ツアアのガイドをしている主人公が帰国して見届ける内容になっている設定はおもしろいが、肝心の動物の生命への問いや鎮魂がなされていない。野生の命と食肉の命を繋げる生命への問いが投げかけられていなければ、せつかくのアフリカの舞台は空転してしまっただろう。「幻想が生の実在を」は、働きのながら通う定時制高校の青春を、実直な筆でよく描いて、一つの世界を着実に留めている。実質のある作品である。「罪」は土岐田耕氏の連作で、七色の二番目に位置する女性がよく描けていて、一気に読ませる力はプロフェッショナルの力量を示している。シリーズ

の完成を期待したい。「鱗」は怪奇譚を下敷きにして現代の画家の「鯉」との恋愛だが、筆力の高さ、文章の密度はかなりの腕前で、よい素材を得れば目を瞠るものが書けそうな気配がある。「未必の同意」は退職させて自殺した部下の妹と男女関係になる構図は、「凍裂」と似ているが、リストラがよく出てくる話なので、筆者が昨年見せたアメリカとい



銀華文学賞優秀賞メダル

う素材に比べると新鮮さに欠ける。「折り目」は木彫りの人形を彫り続けて死んだ父親の業と遺産を、どう引き継ぐかという息子たちの謎解きに寓話のおもしろさがあるが、もう一つわかりにくく、胸に突き刺さってこない恨みがあった。ヨーロッパを舞台にした作品は珍しいだけに次はどんな作品が書かれるか楽しみである。

全体的にタイトルがよくない。内容を象徴していない題が多く、首を傾げたくなるタイトルもある。優秀賞や奨励賞の作品にもタイトルが不十分なものがある。自分の作品を突き放して見る距離を持ってほしい。

小説を書くことでほんとうの自分を見つめ、自身の生を振り返ることは、本来はたいへんなことかもしれない。この世界への問いを投げることは、エネルギーのいることかもしれない。しかし銀華の年齢に立つとき、生に対する刻印は、ここにしか、今しか刻み込めない行為でもある。銀華の特権はもっと大きく深いものもあるような気がする。さらに挑戦をしていただきたい。

今回は、一〇回目を記念して、当選作、特別賞、歴史小説特別賞の各作品を文芸思潮E・ブックに電子出版をすることにした。より多くの方の目に触れるようにしたい。

恥ずかしがらず、一人称というハンドカメラも。

都築隆広



銀華文学賞の応募作は下読み段階では大半が三人称小説である。それが一つ減り、二つ減り、最終選考ともなると、半分近くが一人称小説となる。何故、こんなことが起こるのか？

第三の新人があらわれてしばらくの後、この国には自分のことを『僕』と名乗る、軟弱ではあるが、知的で繊細なモラトリアム期の青年達を主人公にした一人称小説、僕小説なるものが席卷していた時代があった。その代表格が今やノーベル賞候補と目される村上春樹であり、三田誠広であり、伊井直行であり、例を挙げてゆくとときりがなく、こうした作家達も今となっては三人称でも小説を書くが、伊井氏に至っては「五十歳を過ぎた自分に戸惑い、年齢にふさわしい文体がこの世に存在しない」と「青猫家族転巻録」なる「五十過ぎの僕小説」という傑作を生んだ。

銀華文学賞の応募してくる世代の多くは、僕小説が

全盛となったバブル期初頭やそれ以前に働き盛りだったため、こうした作品にハマらずにきたのではないかと。小説というと、かつて通勤電車で読んだ司馬遼太郎や松本清張のような、キッチリとした三人称文体で書かれていなければならないという、気負いや先入観がありそうだ。

三人称とは、いわば鳥瞰する神の視点。映画で喻えるならクレインカメラだ。トルストイの「戦争と平和」に出てくるような大戦場を描くにはこの文体でしか書けないものの、専門教育を受けていない初心者が扱うには正直、複雑過ぎて荷が重い文体でもある。

それに比べて一人称とは個人の眼、ハンドカメラだ。書くのも非常に楽だし、極めれば奥も深い。会社勤めをしながら同人誌や文芸誌にバリバリ作品を発表してきた猛者ならともかく、定年後に初めてペンをとろうという人には、後者の語り口もおススメしたい。

さて、今回の河林賞「梱包の方法」も一人称僕小説の傑作である。作者には失礼だが、文体模写といっても過言ではないほど村上春樹にそっくりな文章であり、現在の村上氏よりずっと、過去の村上文体に似ている。正確に時期を割り出すなら、最初の短篇集「中国行きのスロウ・ボート」の頃ではなからうか。まだ垢抜けきつてない、ユーモアの中にも素朴なモラトリアムが漂う作風である。特に、大人になりきれない「多摩川電化」の店主のキャラクター

が素晴らしかった。五十嵐編集長から、肝心なヒロインのキャラクター描写がおろそかになっているというご指摘を受けたが、この時代の村上春樹作品もこんな感じで、どこか脇の甘い作風だった。そんなところまで忠実に再現されているといったら、これまた作者に失礼だらうか？

当選作「加熱炉」。こちらはカッチリした三人称文体で書かれている（ただし、主人公不在の時間は描かれないので、比較的一人称に近い三人称）。選考では、何人かの審査員の熱烈な支持を集め、平均的に支持があった「凍裂」やそれに続く「梱包の方法」や「沖繩の叔母さん」等に、ギリギリのところまで競り勝った形だった。読みどころはなんといいっても、熱風すら感じさせる加熱炉の描写であろう。後半の展開や結末も実に洗練されている。ただ、「無人君」や「MDMA」といった妙に現代的な単語が、古き良きプロレタリア文学の雰囲気をつまみ出したのは惜しい。

続いて、平均的に支持を集めた「凍裂」。こちらが当選作でもいいと思ったが、作中人物が犯した犯罪について不明瞭な点が多いとの声もあって、特別賞に。途中からの展開が独創的で、「もの忘れ」という日常的な問題から、非日常へと見事に物語が飛躍している点を評価したい。しかし、ラストシーンは「凍裂」という言葉をびつたりあらわした展開になるものの、このまま終わっていいのかわからないという疑問も残った。「加熱炉」にもいえることだが、日

本文学には「耐えられない現実を押し潰される人間達を描く」といった側面が良くも悪くもある。登場人物達も厳しい現実をただ凍えて引き裂かれ、あるいは過熱されて、蒸発してしまう。読者の想像を上回るような逆転や、救済が欲しい。

奨励賞の「きらきら」とけい」。最終選考で最も支持した作品であるが、私が支持する作品はいつも早めに当選作レースから脱落してしまう。我ながら、まるで貧乏神である、肝心の物語は、えせ谷崎のような関西弁の主人公による、橋田壽賀子ドラマ顔負けの女一代記だ。成金趣味との批判も喰らいそうだが、夫の連れ子が犬に噛まれたことをずつと、主人公が引け目に感じているという一点に、それこそきらきらした文学性が宿っている気がした。

優秀賞「沖繩の叔母さん」はオチもの。見事な叙述のトリックで、選考委員一同が騙された。結末や叔母さんのキャラクターもさることながら、素麺ばかり食べていたという少女時代の貧乏風景が涙を誘う。

歴史小説「鎮遠自沈ならず」は史料価値と着眼点はいい。とはいえ、日清・日露の海戦エピソードにはどうしても難解さが付き纏う。かつて漫画家の江川達也が「日露戦争物語」のなかで、日露の海戦を緻密な海図付きで説明していたが、大半の読者は匙を投げていた。本作で描かれる「湾の出口に自軍の船を沈めて敵軍を閉じ込める」作

戦も、「三国志」の赤壁の戦い並みにシンプルな策なのだが、文章で読んでしまうとやはり難しく感じてしまったのは、もうひとつ推せないところだった。

歴史や戦争、緊迫した事件を描くには、時間や空間すら超越する神の視点、三人称というクレレンカメラが向いている。反対に個人の生き様を描くなら、一人称というハンドカメラの方が手に馴染む。

どの文体を選ぶかが、意外に書き手の明暗を分けている。

細く険しい道

大高雅博

今回は下読みの段階ではいつもより厳しくしようと考えた。しかし、結局は、そうはいかず、点数は甘くなったようだ。それは、作品の中に書き手の熱い思いが感じられるためかも知れない。

下読みの段階で、ミステリーの作品があった。この枚数では、中々難しいと思われる。特に、ミステリーのトリックは、アガサ・クリステイが全部考え尽くしたと言われて



いるほどだ。それでも現代のミステリーの作家達は、細い出口を探しながら作品を作り続けている。大変な道であるが、何かを見つけていたかといえたいと願っている。

今回は波佐間義之氏の「加熱炉」を興味深く読ませてもらった。波佐間氏は、以前、カネミ油症事件についての憤りを背景にいくつかの作品を書いている。今回はそれは別系統の作品であるが、例えば次のような文章がある。「熱風が勢いよく舞い上がる。まるで地獄の釜だ。炉の中の周りを囲った耐火レンガまでが焼けただれ、熟したトマトのような色を呈している。」

加熱炉の熱さ、が伝わってくる文章が幾つも見受けられる。働いている人間の、根底で持っている憤り、社会の矛盾が見える。小説を書く動機があり、それが、この小説を成り立たせている。

室町眞氏「梱包の方法」は、まず題名が良い。全般として、題名が良い作品が多い。かなりのマイナスになっている場合がある。題名も作品の一部と考えて気を遣って欲しい。「梱包の方法」は、青春を梱包する意味なのだろうか、中々の作品だと思う。ただ、最後、別れた女性と再会するのだが、それがどうだったか、評価が分かれるところだ。

竹内清氏「1969年・理英子と」は、過激派ものであるが、エンターテインメントとしても楽しめる。行き場をうしなした男女が、逃亡計画を練るが、もう少し先に進んだ

方が良かったと思う。枚数の関係があるのかも知れないが、惜しい感じがする。

佐藤多美子氏の「沖繩の叔母さん」は、面白いアイデアであったと思う。読んで見て下さい。

出井孝子氏の「さらさら とけい」は関西弁でかかれた女性の一生で、この枚数で良くまとめている。

きなりかず氏の「白富士病院」は治療しない病院を描き、現代の問題を問いかけている。しかし、文章が硬い。

丸山史氏の「胸の洞」は、図書室の先生と、不思議な女子学生の話であるが、面白く読ませていただいた。

戸澤洋二氏の「GUITAR」は、ギターにたいする、こだわりがよく表れている。物に対する思い入れも十分に小説になり得る。ただ、筋としては、やや、平凡である。

福野臯氏の「鱗」は不思議な作品だが、僕は、何故か小栗虫太郎のペダンチックな小説世界を思い出してしまった。

最初に、ミステリーは、細く険しい道というような意味のことを書いたが、考えてみれば、どのジャンルでも新しい小説をかこうとすれば、みな細くて険しい道である。

例えば、不透明な風船の中に僕はいる。どこにも抜け出す道は見えない。しかし、針でほんの少しの穴を開けるだけで、風船は破裂して、あつという間に新しい世界が開かれるはずだ。小説には力がある。そう、信じたい。

読み応えはあった

八賞正大



この賞も第一〇回目を迎えることになった。五十枚という制限だからそれに近い枚数分描き切った作品こそ……という思いが、今回はどこか外れたというか、不思議な感じがした。それでも力のある作品は多く、読み応えはあった。単にうまいとか、よく書けているのみならず、作品として好きか嫌いかわ、インパクトを感じたか否か、己の文学観とどう切り結ぶか……まで意識しながら読んだ。印象に残った作品を上げて行こう。

「負の気配」今回、当選作があるとすればこれだと思つた。枚数は二四枚、えつ、規定の半分だ。しかもあまり冴えない女性が主人公。《四十歳を目前にした夫と結婚したのは五年前、私が三十五歳のときだった。夫の実家では、飲食店が立ち並ぶ一角で酒屋を営み、ほかにもアパートやちよつとしたビルも所有していた。私達は実家で三年暮らし、その後、結婚時の約束どおり、町はずれに家を建てて

もらい独立した》何事もなさそうな夫婦、子どもはできない。

しかし、かすかな事件が起こる。その二階の空き部屋を美大二浪の青年に貸すことになる。彼（芯ちゃん）は五歳のとき実母に死なれ、……高校は下宿ですごし、なんとなく気になる青年ではあった。いや、下手な説明はよそう。最初に芯ちゃんを見たのは、本家の法事のときだった。テールから離れたところで、ひざ小僧を抱えていた伏し目がちな瞳は、古井戸の水面のようで、その姿は丸ごと私をたまらない気持ちにさせた。肉薄い鼻と華奢なほほが、青磁のように青白く……芯ちゃんが我が家に来たのは、私が八ヶ月目に入った男の子を、死産したころだった。時々泣いて暮らしていたのを芯ちゃんは知っていた。

ある日、テールに伏せて泣いている私の肩を、後ろから抱えてきた。私が拒まなかったのは、芯ちゃんの体温がそのまま芯ちゃんの淋しさのように思えたからかもしれない。「ありがと」と言い、私は芯ちゃんの胸の中で思いつきり泣いた。光を浴びることができなかった我が子と、芯ちゃんが発する空しさ、私の喪失感、が三角形で繋がった瞬間だった。……

勝負あった。タイトルはいま一つだが、すでにこのページ目から、この不倫という名の命の関係は、見事に読者の心を貫いたのだ。そんな関係が続き、さすがにやばくは

なる。しかし事態を見抜いた母親が出てきて、夫と芯ちゃんと私の間を取めてくれる。《芯ちゃんので肩をはいた母が岩盤のように見えた》と。不遇な青年芯ちゃんと、取り立てて華のあるわけではない主人公、純粹ゆえに未成熟なまま強く反応し合った二人は、それぞれの人生へ半歩背を向けて歩み出す。《夕方、干しあがった洗濯物にくるまり私は少しだけ泣いた》と終わる。どうだ、布団で泣くのは、自然主義文学のかつての旗手田山花袋だけではない。また年齢が若くなくても見事に背中では蹴れるのだ。

「沖繩の叔母さん」これもまた当選作に押ししても良いと思った。二二枚と四行。《春浅い三月の始め、差出名大阪のS市にある老人施設から》速達が届く。そこには「叔母」の名前の沢田恵子とも書かれていた。彼女は主人公が小学生の時、一度会っただけの父方のたった一人の肉親だったところ、主人公の家は、かつて《今にも潰れそうな、小さな鉄工所で働く父と病気がちの母》だけであり、親類付き合い合をする余裕もなかったのだ。そんな家へやって来てくれたのは、その恵子叔母一人だけだった。しかし、思い出すとやけにはしゃいで派手な感じ、化粧も濃厚だった。父は怒りを表し、母はどこか怯えて硬くなっていた……。恵子叔母は貧しく大変だった家庭へ、一と月分ほどのお金をおいていってくれた。

さて、その施設へ主人公は迷惑な気持ちを抱えつつ行く

ことになる。《血の繋がる人間は、叔母で終る。……一人っきりの、さばさばとした人生が私はすきなのだ》と、寂しさを押し隠し居直った気持で。すると出てきたのは——沢田恵三という叔父さんだったのだ！ 主人公の貧しかった家を励ましに唯一沖繩から当時来てくれた叔母は実は、ゲイの叔父さんだったのだ。

ラストがいい。《ハイビスカスのワンピースならぬ、白い長袖のセーターの上に、ベレー帽と、同色のピンクのロングベストを着て小指を立てている、何十年ぶりかに見る「叔母さん」ならぬ「叔父さん」の女らしい仕草が、たまらなく可笑しかった。そして、なぜか突然涙があふれ出て、なにもみえなくなつた》

人間の孤独は、性別などを超越し命の有難さに向かうという事実を示してくれた小説だ。商業誌文学が単に奇を衒う新しさのみを追い始めて久しい。言葉が人間の情に活を与え、命の有難さを感じ直させ得るものである——という原点に戻ることだ、それがここにはある。

「加熱炉」ある分塊工場に勤める青年が主人公の話である。その工場には溶鉱炉があり《炉からの熱風が地上10メートルに架設されたクレーンまで勢よく舞い昇っている》そのクレーンを扱うのが仕事だ。《クレーン運転室は真冬でも40℃は下らない……一回だけエアコンの故障で熱中症になりかけたことがある。頭がボーっとしてきて体

が震え出した……腕まくりした肘が、焼けた下アの鉄の部分に触れて焼けどした。皮肉にもそのショックで彼は意識を取り戻し、熱中症は免れた》とある。過酷な現場だ。そこに事件は起こる。

修理のために来ていた電気整備工を大声で呼んでも返事はない。主人公は「修理中」の掛札を外し、直ったクレーンを操って行く……その瞬間、何かの物体が炉の中に落ちて消滅したのだ。そのあたりの描写は実に良く臨場感をもつて煌いて伝わってくる。

ただ、話はそれを目撃し擁護してくれた？ 仲間からの「借金」要請になり、その仲間も実は女への情のために事件をたくらんでいた……という金がらみ、情がらみの話になつてしまった気がする。ラスト、その仲間も加熱炉へ飛びこんで自殺してしまう。

プロレタリア文学とは時代状況は違うが、人間の扱いかねる巨大エネルギーに直面する末端の人間の一瞬のミス、それに触れた人間としての不条理と命の値踏み……そういったものを読みたかった。原発まで大きくはないにしろ通底したテーマとして。

「寒夜」九十一歳になる父親。五年前に、彼は八十三歳の妻を亡くしている。その息子から見た話。《わたしは年子の兄と妹二人の四人きょうだいが、四人とも東京で暮らしているの、それぞれが適当な間隔をおいて浜松市に住エゴを捨てた相手を思いやる気持ちがある。筋書きは単純ではあるが、この他者を思いやる互いの心は、読んでいて涙が出てくる。人間の心の気高い感性の骨格が描かれている。淡々とした文がいい。

「雨の愛子」流産して子どものない女性が、娘の幻想を見る話。描写にかなり迫力があり、診察を受け妄想とみなされるもの、それを超えてまだ残る何かがある。そこに人間の思いの深さを見せつけられる小説の終わり方に工夫を感じた。

「1969年・理英子と」学生運動の時代。組織から抜けた女学生をかくまう男。彼女の父親は警察のお偉いさんだった。何の役得もなく、身勝手な彼女も去るが、他人の物語は他人のものであって、寂しくも己の道を探そうとする青年の話。派手さはないがその時代の心性は描けている。

「凍裂」インパクトのある筋立て。夫との仲が不遇な女性、偶然から冤罪を生ませ、その犯人とされていた男を愛してしまう。タイトルはともインパクトがあり、内容を表しているが、男がなぜ逃げていたのか、その母親の自殺、そしてラストの救いようのなさ……などどこか作られた印象があり、強くは押せなかつた。

「獣魂碑」ケニアでガイドをする弟と生き物の解体業をする兄との交感。人間の業に対する目が描かれている。

む父に様子うかがいの電話を入れる》という子どもたちとしての対応。文は淡々とした会話と想い出、また仕事の描写の中に、老いた「間もなく」かもしれない父への情が湧いてくる。《思いがけなくも唄を口ずさむ父の音が偲び入ってきた。歌は「五木の子守唄」であった。父の唄を生まされてはじめて聞くわたしは、……そのプロンプターのような低い寂れた声は、どうあがこうと逆らおうと、どのみち枯れて朽ちていくよりほかない一人野末を行く老人の孤独の木霊のようで、わたしは指先二センチほど引き戸をずらして覗いた》そして気難しく利己的で傲慢で母親に文句ばかり並べ立てていたかつての父親は洩らすのだ。《……なあ、だれでもいいから、すぐにも同居してくれないか》今日まで胸のうちで硬い塊になるまで、ぎゅっぎゅつと丸めていたものを、ふいと投げつけられてしまったわたしは、さつき遠くに聞いた、今のうちだぞとの声は、やっぱり親孝行をするなら今のうちと囁く父の声だったと悟つたが、わたしは、あくまで幻聴にしておきたかった》人間の命の末期を看取る者の、綺麗事でない事実を淡々と描くのも文学の役目だと思える小説だ。

「アリアン恋歌」古の朝鮮の民謡に題した悲恋の話。誓い合った恋人が日本に行ってしまう。その恋人を追って主人公の女性はやがて捜しに日本に来る。会えたと思つたのもつかの間、彼にはすでに妻子がいた。……女性たちの、

「水の中の笑い声」 聾啞者を母にもった娘の人生。障害というのとはある種現代的な観点から捉えられるが、この舞台は江戸時代であり、なかなか斬新な切り口を感じた。

「栗栖野」 本当の命の歌を求めた和歌読みの男の人生。出てくる短歌はかなりのものと思われるが……。

「梱包の方法」 十九歳の青年の眼から見た電気屋のアルバイトを通しての、大人の世界？ 梱包の方法というところが、何か惹かれたが、どうもそれが生かされていないような……そして文体が、すでに読んだことがあるような。

「白富士病院」 癌で死んで行く一人の老女を看取る医師の苦悩。社会派的な医療への問題提起がなされている。

「父はひとり」 健康保養所プリズンという所に拉致された男の話。発想は面白いのだが、果たして個人の意志を無視したそんな拉致、そして場が可能だろうか……。

「いのちの記憶」 人生を共に過ごした愛犬の死。心情がよく描けている。

「熾火」 父母を亡くし、抑鬱神経症を患う弟と暮らす兄弟を支えつつ、本人が事故になってしまおうという結末……設定は切実だが解決が見えない。

「スコール」 あしなが「おばさん」としてベトナム人の子に援助し、裏切られる元小学校女教師の話。教師の心機は伝わる。

「GUITAR」 青春時代の思いでのギター探しと昔の

を見下す十階の事務所からは雨に煙る新宿西口の高層ビル群が見えた。彼は背を向けたまま「お前よ、悪を書いてみないか」と唐突に切り出したが、ぼくににとってはそれはまさしく青天の霹靂だった。何日か前「消える島」の原稿を渡してあったから、その合評でもあるのだろうと期待していたが、そのことには何も触れず予想もしなかった提案に、ぼくは一瞬ためらったが、「先生が書けと言われれば挑戦します」と答えていた。中上健次は言い訳を最も嫌う。大抵の場合、ぼくは即答していたが、その時の一瞬のためらいに彼はぼくの心中を察したのだろう。「飲みに行こう」と誘った。当然、ぼくは従う。事務所のある建物と面した大通りへ出ると、雨のせいで空車のタクシーはなかった。仕方なく近くの居酒屋へ入った。店主が気を利かせて奥の席を取る。彼はいつもの焼酎に梅干しを二つ入れたグラスを傾ける。ぼくはビールだった。

「お前は時間がないだろう」「はい」当時のぼくは昼間は東京都のゴミ収集作業員として汗を流し、それが終わると中上健次事務所へ。そして、新宿から藤沢の自宅へ帰るという生活であったから、原稿を書く時間をこじあけるのにもいつも悩んでいた。「お前な、時間がないということは無駄な時間がないということだぞ」ハイライトの煙草をくわえた彼の口元へライターの火を差し出すほどの目を見てやさしい口調で告げる。「はい、わかりました」ぼくは多分、

仲間たちとの再会。青春の回想感覚は描けている。「遅い日没」 山岳小説。登山者を思う麓の女性の心が清く、文体もいい。山をこよなく愛してしかも登山を人生の糧としてきた作者ならではの。

「罪」 性描写はおどろくほど巧みに描かれてはいるが……。

「ぬけがら」 自殺した母親、蟬の抜け殻に投影する主人公の思い。描写は鮮烈なところも。

「動かない海」 共に癌になった老夫婦の回想と思ひ。落ち着いた文章で味わいを持って読めた。こんな夫婦の老後もあるう。

時間がない

秀作にしようとする執念

小浜清志



中上健次事務所の電話番号をするよ
うになって半年近くが過ぎた雨の日の夕方、中上健次はいつものようにワンルームの事務所へ無言で入ってくるなり、窓辺へ進み煙草を吸った。ぼくは灰皿を片手にそっと背後に近づいた。新宿中央公園

小学生が担任の先生へ返事をするような顔をしていたであろう。「俺もな、羽田空港で飛行機の荷の積み降ろしをしていただろう、乗り換えの神田駅の喫茶店で原稿を書いて、あと十分、欲しいと思っても遅刻する訳にはいかなから席を立つ。苦肉の策として職場の休憩時間に便所へ行くんだ。洋式の便器のフタを閉めその上に紙を広げて原稿を書いたこともあった」彼の言葉は重かった。それまで何度か、時間がないことを理由に誘いを断ったことがあったが、その日を境にぼくは中上健次の誘いを一切断らなかつた。以来、ゴールデン街、文壇バーへのお伴は勿論のこと、カンヅメ先のホテルのバーへ、果ては和歌山の行きつけの飲み屋、石垣島のリゾートホテルまで来いと言われればとんで行った。中上健次と向き合う時間だけは絶対に無駄ではないと腹をくくっていた。

さて、悪を書けと言われてもまったく何もできない日は何日か過ぎた。十日後にシノップスを届ける約束になっていたが、作品の糸口さえつかめぬまま時間だけが過ぎる。いつそのことギブアップして「消える島」の原稿に戻りたいとも考えた。(自信作であったし、後日、ぼくに就いて初めて芥川賞候補にもなった)なぜあの作品ではなく、あえて悪という、これまで想像すらしなかったものを書かねばならぬか。苦悶は朝の目覚めと同時に広がり一日中重くのしかかるが、思考はずっと停止したままだった。体の

変調すらきたしていた。いよいよ約束の日を一日残すだけとなったとき、それまでの考えを止め、悪とは一体何かと考えた。それまでは悪につながる筋書きや人物などを懸命に書きとめていて、ラチがあかなかった。しかし、九日間悩みつづけてきて悪を解明する鍵を見いだした。つまり、悪の構造を作るのではなく、悪という行動パターンを書けばいい。これがぼくの解答だった。そして、一気呵成にシノップスを書きあげた。この世には悪も善もない。生きる人間がいるだけだ。金を作るために国有林から木を盗み密売する。その作業中に転落する仲間も見殺しにする。金を貸していた男の妻を凌辱する。その男の中に悪はない。ただ必死に底辺を生きる。これが十日間でぼくが考えた作品のテーマだった。約束の日、中上健次を訪ねる。彼は黙って多くの説明を聞いたあと簡単に尋ねた。「何日で書ける」「四十日」「長い」「では何日もらえますか」「二十五日」「わかりました、ではこれから書きます」立ちあがっておじぎをするぼくを制して「よし飲みに行こう」と彼は平然と言う。時間がなくても飲む時間くらいはあるだろう。こうして生れたぼくの悪を描いた「陽光」であったが、書きながらぼくは感謝していた。まったく異質なものに挑むことで作品の幅を広げさせようとしてくれたのだと。さて長々と自分のことを書いてしまったが、何らかの参考になればと。十回目となった今回の選考でしみじみと思い知

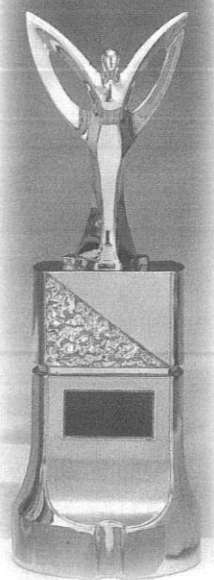
らされたのは、上手い作品が多かったということである。高得点をあげた「凍裂」「梱包の方法」「1969年・理英子と」「沖繩の叔母さん」「白富士病院」のどれもが筆力もあり、小説としての迫力もあった。私は「沖繩の叔母さん」を非常に興味深く読んだ。素材としては一流である。折角、五十枚という枠があるのだから、角度を変えた場面があったならさらに深みのあるものになったであろう。作品とは作者の誕生させた想像物であり、作者は神のような存在である。しかし、神ではあってもあまりに無雑作に創ってはならないし、不用意に人物を配置してはならない。「梱包の方法」の後半でなぜ無理な再会が必要であったか。これがなければ私は更に加点をしただろう。同じように「凍裂」の重い展開は作品を軽くしているが、この作者の筆力は圧倒的である。

う。「歌うテネシーのじゅんちゃん」は軽妙な語り口は素材に恵まれれば輝きを増すであろう。

毎回、残念なことは題名をもっと工夫して欲しいということである。題名とは初対面の人の服装や顔のようなもので、普段着ではない気くばり目くばりをすべきであろう。

最もお願いしたいのは推敲である。誤字脱字があるだけでも作者の品位を問われるし、作品として世の中に出そうとするからには、何度も眺め直し書き直しをすることは当然のことである。確かに書く作業は辛く疲れれるものであるが、作品を書きあげることだけで満足するのではなく、一流のものにしよう、秀作にしよう、という執念は必ず読む者に伝わるしそれが作者の大きさになる。推敲にやりすぎるといふことはありません。森瑤子という作家のデビュー作は百回の推敲をしたそうです。私の先輩の東峰夫という芥川賞作家は「オキナワの少年」を十年間書き直したと言う。小説を上達させるには推敲しかありません。書き直す作業の中で文章はみがかれてくるし、作品を読む力、創る力も生れてくるのです。

選評



河林満賞記念トロフィー



選考会風景

第11回 銀華文学賞 作品募集

銀華文学賞は、人生経験豊かな壮年・熟年・シルバー世代の文芸創作活動に光を当て、その小説作品を賞揚し、文学創作エネルギーを顕彰するものです。埋もれた才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、広く社会に知らしめ、真に価値ある作品を世に残すことによって、日本文学の興隆に寄与することを目的とします。

11回を迎えた今年も、どうぞ奮って銀華文学賞にご応募ください。

●●募集要項

募集内容●オリジナルの短編小説作品。これまで同人雑誌などに発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る（複数応募者は失格とする）。

応募資格●2014年6月30日現在において45歳以上の者

応募規定

400字詰原稿用紙50枚以内（20枚くらいのもので可／原稿用紙使用の場合は必ずA4の原稿用紙を使用のこと）。ワープロ原稿はA4用紙40字×30行で印字。必ず右上を綴ること。応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取って応募のこと（コピーを応募するのが望ましい）。※応募審査料が1500円かかります。

別紙に①タイトル②本名およびペンネーム③年齢・生年月日（年齢・生年月日のないものは失格とする）④〒（ないものは失格）・住所⑤電話番号⑥職業・略歴⑦400字詰換算原稿枚数を記したものを添付。⑧応募部門（第11回銀華文学賞応募

作品と明記）⑨応募審査料1500円を郵便為替で同封。外国からは15USドル。応募者には結果を通知し、希望者は作品をインターネット・ホームページに掲載する。

応募先●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

文芸思潮「銀華文学賞」係

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

賞●銀華文学賞■賞状・トロフィー・賞金20万円（受賞者複数2名の場合は10万円、3名の場合は7万円）★当選作は電子出版

河林満賞■賞状・トロフィー・賞金5万円

優秀賞■賞状・賞メダル・賞金3万円（4名以上の場合は2万円）

奨励賞■賞状・賞メダル 佳作・入選■賞状

選考委員●作家集団「塊」メンバー

締切●2014年6月30日（当日消印有効）

発表●予選通過者は2014年11月末発売の「文芸思潮」58号に発表する。受賞作は2015年1月25日発売の「文芸思潮」59号に発表掲載。優秀作・奨励賞など優れた作品も順次「文芸思潮」およびインターネットに掲載する。

主催●文芸思潮

※主催者から 真摯な文学創作に打ち込んでいる人々に光を当てたい。強烈な体験、斬新で強靱な視線、震えるような共感、心に迫る文章、魂を打つ言葉を期待しています。熟年世代・シルバー世代の底力を見せてください。

※恐縮ですが応募審査料1500円を御協力くださいますようお願い申し上げます。

文芸思潮 銀華文学賞・エッセイ賞・現代詩賞・

イラスト・漫画賞

授賞式&祝賀会・新年懇親会

読者の皆様、今年も「文芸思潮」銀華文学賞・エッセイ賞・現代詩賞・イラスト漫画賞の授賞式および祝賀会・新年懇親会を次のように開催いたします。

どなたでも参加できる楽しい文学の集いです。創作への熱い思いを交わしましょう。どうぞご参加くださいますよう、お願い申し上げます。

日時●平成二十六年一月二十五日（土）

授賞式午後二時／祝賀会・新年懇親会五時

半

会場●東京都大田区民プラザ地下小ホール

東京都大田区下丸子三・一・三

TEL03・3750・1611

※東急・多摩川線「下丸子」駅前

会費・飲食費●授賞式無料、祝賀会一人五千円

問合せ・予約申込●アジア文化社・文芸思潮

TEL03・五七〇六・七八四七編・五十嵐まで

または090-8171-9771まで

銀華文学賞選考委員プロフィール

小沢美智恵

おざわ みちえ

1954 茨城県生まれ

千葉大文学部卒

93「妹たち」で川又新人賞受賞

95評伝「嘆きよ、僕をつらぬけ」で蓮如賞優秀作

06「冬の陽に」で千葉文学賞受賞

大高雅博

おおたか まさひろ

1954 石川県生まれ 日大文学部卒

80「旅する前に」で群像新人長編小説賞受賞

他に作品「跡地の王」、共著「トライ・トゥー・リメンバー」など

都築隆広

つづき たかひろ

1978 山梨県生まれ 東海大文学部卒

2000「看板屋の恋」で第91回文学界新人賞受賞「狼を見る」（「文芸思潮」）「ハンコの町の鰻がいる家」（「三田文学」）他

短編映画「ウミスズメ」脚本（吉本興業・宮崎県門川町製作）他、放送作家としても活動中

八賞正大

はっかく まさひろ

1952 東京生まれ

早大理工学部数学科・都立大仏文科卒

91「十二階」で新潮新人賞受賞 文芸学校・

NHK学園講師 主著『「シュルター」発』（けやき出版）『夜光の時計』（新読書社）詩集『朝一の獲物』『学校のオゾン』（共に洪水企画）

小浜清志

こはま きよし

1950 沖縄県生まれ

劇団四季など様々な職を遍歴

87作家中上健次に師事、マネージャーを務める

88「風の河」で文学界新人賞を受賞

五十嵐勉

いがらし つとむ

1949 山梨県生まれ 早大文芸科卒

79「流謫の島」で群像新人長編小説賞受賞 84-90タイ在住、カンボジア問題を取材「東南アジア通信」「ASIA WAVE」編集長

主著『緑の手紙』（インターネット文芸新人賞）『鉄の光』他の作品に「ノンチャン、NONGCHAN」「聖丘寺院へ」などがある

作家集団「塊」メンバー

梱包の方法

室町 眞しん

まだ十九歳にすぎなかったあの春休み、僕はいささか暗鬱な問題をいくつも抱えこんでいて、逃避先とでも呼べるものをひたすらまさぐっていた。といっても実際には何の行動も起こしていなかった。そう、たしかに僕はアルバイトすらせず、日がな一日ベッドに寝転んで、ただ怠惰にすごすだけだった。あるいは問題があまりにも深淵すぎて、僕の心細い処理能力ではどうやってでも始末できなかつたと言いついては、言いかねない。

そのころ、僕の家族が暮らす家は東京都下の多摩丘陵に建っていた。その時分に急速に開発された、いわゆる振興住宅地の小高い丘の上にある、青い瓦屋根の二階家だった。

けれどそんな幸福な時代は小学生までの話で、中学以降は慢性的なストレス性胃潰瘍に苦しむ、内向的で偏狭な少年にすっかり変貌してしまった。ほどなく僕は不登校児に近い不機嫌な少年となり、ひたすら自室に閉じこもって、難解な現代詩ばかりを読んですごすようになった。たまに登校しても、同級生が普段何げなく使っている日常会話をことごとく嫌悪し、不毛な文学論争ばかりを繰り返していたから、クラス内では完全に「変わり者」扱いされてもいた。むしろ学校の成績も一気に悪くなった。

そんな状態では、当たり前だが、友達なんか一人もできっこない。とにかく人は変わる。時代と同じだ。予測なんてまるで立たないのだ。僕がそういう変人にすっかり傾いてしまった原因はすべて父のせいだった（少なくとも僕はそう考えていた）。父には長い間、公然とつきあっていた愛人がいた。母がいくら糾弾しても、祖父母や親戚が何度たしなめても、父のふしだらな行動はまったく衰える気配を見せなかった。

当然ながらそのせいで、僕の家は重く淀んだ空気になえず包まれていた。目を追うごとに父はしだいに家に寄りつかなくなり、僕が都立高校に入学したころには、ついに愛人を都内のマンションに囲いこんで、そこにすっかり居ついてしまった。それを知った僕はますます依怙いこい地になり、めったに笑わない陰険な青年へと傾斜をさらに深めていっ

自宅の周囲は深い雑木林で包まれ、沼や池や沢があちこちに点在していた。実際のところ、たくさん昆虫や両生類がうじゃうじゃ生息していて、「虫好き」だった僕の好奇心を常に満たしてくれた。秘密の隠れ家を友達と一緒に作るための、たあい材料——藁わらや蔦つたや粘土など——もいたるところに溢れていた。たとえば不思議の国のアリスが兎に導かれて深い穴の中に入っていくように、とにかくそれらを目にしただけで、僕の想像力は非日常的な別の世界へとたえず導かれていったものだった。

そのように、ある時期までの僕は同級生達と連れ立って毎日外を出歩く無邪気で明るい少年時代をすごしていた。

た。

いささか大げさに聞こえるかもしれないが、僕は父の不倫という、救いようのない人間不信を一身に抱えこみ、文学の真理の中だけに、きつとその身を置こうとしていたのだらうと思う。世の中だって、新宿駅が学生の手で放火されたり、アメリカの原子力空母が佐世保に入港したり、東大が長期間占拠されたりして、どこもかしこも騒然としていた。そんな不穏な社会に対して、若い世代が無自覚でいられるわけがない。どんなに鈍感なやつだって、「まともな時代じゃない」って、きつと嘆いていたはずだ。

高校時代の僕は肩に届くほど長く髪を伸ばしていた。煙草だつてすでに吸っていた。あえて長髪にしたのは、むしろ「あの悪しき時代」に対するせめてもの抵抗のつもりだった。髪を長く伸ばすことが時代へのアンチ・テーゼにそのまま通じるなんて、今から考えれば実に妙なことだらう。だが、たしかにそういう気分だったし、単なる僕の個人的な思い入れとも明らかに違っている。だれもが今はすっかり忘れ去っているのだからけれど、その時代に生きていた多くの若者の、きつと「代表的な気分」だったはずだ。どんな人間にもそんな時節が一生に一度くらいは必ずある。とにかく若かった。そういうことだ。

そんな偏屈さばかりが目立つ自分ではあったが、高二の

初秋に、わずかに一度だけ人並みに恋らしきものを経験した。はじめてできた恋人は茉莉という名前前で、同じ高校の一級下だった。茉莉は細面で、すらっと背が高く、外に向かつてカールした髪の毛がなかなかチャーミングな女の子だった。彼女とは文化祭の「現代詩朗読会」に何気なく参加してから急速に親しくなった。学校内で孤立していた僕がなぜ朗読会に足を運んだのか？　もうよく覚えていない。でも単なる気紛れではなかったはずだ。もしかしたら僕は、心の奥底ではだれかと繋がりあっていたいと日々切望していたのかもしれないし、よくない現状からの脱却を密かに目論んでいたのかもしれない。

僕は茉莉の存在を「あの子だけはみんなとは違う種類の言葉を使っている」とやや興奮気味にすぐに過大評価した。無理もない。最初のころの彼女は、難解な言語に埋めつくされた現代詩を愛読している珍しいタイプの女の子だったからだ。当時、学校内の女の子の関心事といえば、家庭課の実習で作ったプリンの贈り先をどの男の子にするかとか、制服のスカートの丈をどのくらいの長さにしたら格好いいか、といった類いのはなはだ無邪気なものばかりだった。だから茉莉のような、ある種前衛的な女の子は僕のまわりにはだれ一人存在していなかった。

僕達はそれ以来何かとウマがあい、朝夕手を繋いで毎日一緒に通学したし、野芝が生える丘の上では、キスの真似かけてはいたが、僕も彼女もまだお互いを認めあっていたからだ。

僕はひどくできの悪い学生だったけれど、茉莉は学年で五本の指に入るほど成績のいい女の子だった。将来の夢は外交官で、英国の大学へ留学したいと常々語っていた。実際に熱心に英語を学んでもいた。その希望を叶えるために彼女は高三になるとすぐに、東京の有名女子高校に編入し、家族ぐるみで都内に転居していった。一方、僕は受験に失敗して、情けなくも予備校に通う身分になった。

その予備校には、どういうわけか、いつも僕の隣の席をわざわざ求めて座りになる妙な浪人生がいた。学生服の詰め襟のホックをきちんと止め、ものすごく度の強い黒縁の近眼鏡をかけている小太りの青年だった。「黒縁」は僕がいくら無視しても平気でにじり寄ってきた。ときには母親が作った、おにぎりをきちんと二等分して僕に与えようとしたし、「君のお口は煙草臭いよ」と眉をしかめながら仁丹をくれたりもした。要するにお節介で親切なやつだったのだ。でも僕はそういう彼の言動がどうにも煩わしくて、狭い校内をひたすら逃げまくっていた。おそらく僕の間嫌いは茉莉との交際を経てまったく変わっていなかったのだろうと思う。

茉莉が都内に引越したことで、僕らの交際は大きく様変わりしてしまった。やむなく二人はやや遠距離恋愛的に

ごとを楽しんだ。そして二人だけで遊びにいった海辺では、赤い夕陽に染まりながら、お互いの大好きな詩を何編か朗読しあったりもした。

僕は茉莉の直截的で明快な話し方が好きだったし、膝枕をしてもらったときの柔らかい腿の感触が大好きだった。茉莉のほうは、僕のやや気障なところの目立つしゃべり方を好み、真つすぐに伸びた細くて長い脚をもっとも好んでいた。そうやって二人だけだと、父のことを、あるいは妙な具合に進んでいる世の中のことを、わずかばかりではあるが忘れられて、僕はどうにかこうにか平常心を保っていた。

茉莉は頭脳明晰でいて、かつ「文学少女」だと僕はすっかり思いこんだ。けれどもほどなく、彼女は突然現代詩から廻行して、浮わつた言葉で愛を賛美する詩や、できの悪いハーレクインロマンを愛読する少女に変貌してしまった。そのような文学的変節は（彼女にとっては普通でも）僕にはまるで理解できない種類のものだった。そのことを、やや遠慮がちに咎めたとき、彼女は「いいじゃない、そんなことどっちでも。それよか」と笑い、僕の手を強く握った。本当はもっと別の何かを僕に求めていたのだろう。

父につづくこの茉莉の変貌ぶりに僕は少なからざる混乱をきたした。けれどもだからといって、それで僕らの仲がすべて終わったわけではなかった。若干のズレこそ生じか交際をつづけた。しかしながら、いくら離れているといってたって、たかが都内と都下のわずかな距離しかない。直接会ってデートの真似ごとをするくらいそれほど難しくはなかったはずだ。それなのにその年、僕らはたった一回しか会わなかった。今から思えば、そもそもその辺りから二人の仲は妙な具合になっていたのだろう。

当時、他者に何か自分の意志を伝えなければ、①直接会いに行く。②電話をかける。③手紙を書く。④（ごくまれに）電報を打つ。——それくらいしか手立てがなかった。パソコンもファックスも携帯電話もまだ出まわっておらず、インターネットやメールやツイッターの存在だって、火星の酸素のようにどこを探しても影もかたちもない悠長な時代だった。たぶんA地点とB地点の間には、物事の迅速性を疎ましがる意地悪な小母さんが呑気に昼寝をしていたのだろう。僕達にとって唯一のコミュニケーション手段は電話——むろん固定式電話で、家族の耳がたえず気になって、こみ入った話ではできなかった——と手紙だった。あるいは手紙の変種である交換日記だけだった。

そんなふうには接しているうちに、微妙なところで二人の間柄は日々疎遠な感じになっていった。やがて大学受験が済んで、彼女は希望どおりイギリスの大学に留学することを決め、僕は滑り止めで受けた三流大学の文学部だけにかろうじてめぐりこんだ。そんなこんなで、その春のころに

なると二人の交際はますます密度が薄くなっていった。彼女との交際を継続させることがいつしか僕には大きな負担となってしまう。交換日記はしばしば滞り、電話の数も急速に減っていった。きちんと連絡をしなければと、しょっちゅう思うのだが、そう思っただけで僕は多分に気が重くなっていた。二人が使う言葉の質に大きな隔たりを感じはじめたのだ。使う言葉が異なるということは、たぶん生き方が違うということにも通じるはずだ。

折り悪く、母と父の別れ話はちょうど最終局面に入っていた。僕には離婚後の父が家族に対してどのように対処してくれるのか、まるで真意が掴めていなかった。少なくとも、それまでの父の言動を見る限り、明るい将来はまったく見こめなかった。もし父の愛人への傾斜がよりいっそう深まれば、会社すら不意にやめかねないような不穏な予測もしばしば浮かび上がってきた。そうなれば、家族が住む家だってどうなるか、まったく分からない。

そんな認識がつるにつれて僕の不安は日をかさねることに大きくなっていった。それでも時折、僕は彼女の太腿の感触を懐かしく思い出した。特別におくというわけではなかったけれど、まだ僕は一度も寝ていなかった。寝たかったのだと思うが、父の不倫騒動が深く影響していて、そういう気分には僕はどうしてもなれなかった。

大学の合格発表が終わってしばらく経ったころ、茉莉か

もやもやした状態のまま、たちまち季節は進み、ふと気づくと三月の中旬になっていた。

一日じゅう家に引きこもっていた僕は、「あんたが家にいると商売の邪魔なの。私に損をさせる気？」と母に冷たく言い放たれて、とうとう家を追い出されてしまった。無理もない。そのころの母は近所の主婦達を集めて自宅ホームパーティーを開き、とある家庭用品を販売して、かなりの額の収入を得ていたからだ。おそらく離婚後の自立の道を密かにさぐっていたのだろう。でもそれはほんの口実で、きつと本心では息子を外出させるための、体のいい理由をあえて作ったはずだ。それが証拠に、出かけたことなくとさんざん粘ったが、母はまったく聞く耳を持たなかった。僕は煙草とマッチだけを持って洪々家を出た。(仕方ない、公園のベンチで寝転びながら煙草でも吸って時間を潰すか)と気分を切り替えた。数日ぶりの外出だった。家の外には知らないうちに春の気配が立ちこめ、甘ったるい花香りが漂っていた。何だか世の中から自分一人だけが置き去りにされたような変な気分がしてならなかった。

駅へとつづく長い道なら坂をやつと下り終え、商店街を歩いているときだった。とある電器店の店頭には貼られていた一枚の張り紙が、まるで僕を呼んでいるかのようになにに目に留まったのだ。商店街にはコンビニやスーパーマーケットはまだ一軒も存在せず、個人が経営す

ら久しぶりに手紙が届いた。そこには『九月の入学式を待たず、ホームステイをしようと思っています。そのため少し早いけど、四月末までにはロンドンに旅立ちます。一度ぜひ会いましょう』と書かれてあった。当然返信するか電話をかけるか、あるいは直接会うかしなければならなかった。

手紙をもらったことで、僕の心は、「会いたいという気持ち」と「このまま会わないで済みたい」という思いが複雑に交錯して、誤った重量の錘を載せたときの天秤のように、不安定に揺れつづけた。何という優柔不断な男だろう？僕はそういう思いにしよっちゅう悩ませられた。あるいは淫蕩な父の血が自分にも流れているかもしれないと感じ、しばしば吐き気を覚えてもいた。きつと今とは違って、まだ繊細だったのだろう。

僕はやむなく自室にこもり、愛読していたコナン・ドイルの小説に逃げこんだ。当然だが、そういう逃避行動はまったく徒労に終わってしまった。上手くいって一ページ、たいていは数行読むだけで、文章の行間に茉莉や父の顔がすぐに浮かび上がってきた。本の中では、ワトソン君がホームズのうんちくを聞いているだけで事件はまだ何も起こってはいなかった。そのようなわけで、大学の授業がはじまる前の春休みを、僕は妙な気分にも包まれてすごしていた。

小さな店だけが背骨のように道路の両側に並んで建っている。いた。

『アルバイト急募！ 年齢不問。大学生可。時間要相談。多摩川電化』

僕はしばらく張り紙の前で佇んだ。シナプスが脳内で瞬時に光った気がした。そうか、そういう手があったかと思つた。僕の頭の中には「猶予」という言葉と「逃避」という言葉が同時に明滅していた。『アルバイトが忙しいから……』という彼女への弁解の手紙の文面もすぐに思いついた。僕は張り紙に見入りながら何とか逃げ場所(茉莉からも父からも)を確保したいと思わず前のめりになった。

「大学生かい？」という声で僕は振り返った。いつの間にか背後に小柄な男が立っていた。男は遠近用の茶色い籠甲縁の眼鏡をかけ、濃紺のやけにテカテカしたジャンパーを着ていた。年のころは五十すぎといったところだろうか。肩幅が極端に狭く、顔の半分くらいが額という奇妙な風貌をしている。

僕は頷き、「もう卵ではないけれど、サナギでもないかな」と言葉を選んで答えた。我ながら実に妙な受け答えをしたものだ。言語感覚が妙なのは茉莉ではなくて、むしろ僕のほうだったのかもしれない。

男は手に持っていたハタキの羽の部分ピンと引つ張りながら顎を突き出し、「ふーん、なかなか面白い表現をするね、まるで詩人だ」と唸った。それから「要するに待機中の身分ってわけなんだろ」とそっけなく言い直した。その拍子に眼鏡がずり落ちた。ひどく頼りない顔だった。

「もう決まっちゃいましたか？」と僕はポケットの中の煙草とマッチを握りながら聞いた。

「決まっていりゃ、さっさとビラははがすさ」

男は気がなさそうに言葉を放つて、両脇にうず高く積まれた商品の間の細い通路を歩きはじめた。ワーナー・ブラザースのアニメのキャラクターみたいに、どこか奇異な歩き方だった。チャップリンほど滑稽ではないが、その後ろ姿はどこか哀愁に満ちていた。

「よかつたら入んなよ。コーヒーぐらいはご馳走するからさ」と男は振り向かずにはがした。

僕は気に入られたな、と直感した。どうしてだかは分からない、ただそんな気がただけだ。男はどうやら店主のようだった。正面から見ているときはまったく気がつかなくたって、背後から眺めたら後頭部がすっかり禿げ上がって、頭皮がアトランチス大陸のようなかたちで大きく露出していた。店主の後ろにくっついて、僕は店内に入った。

店主は店の奥の、レジの背後にあった折り畳み椅子に座ると、コーヒーメーカーの容器の中にコーヒーの粉と水と

似ているね、二人は」

「母と僕がですか？」

頷くと店主は足を組み直した。ものすごく大きな黒い運動靴が僕の目の前に迫ってきた。そうか、それでか、と僕は変に納得した。一七八センチある長身の僕だって足のサイズは二六センチしかない。それなのに僕の肩ぐらいいしか背がない店主の足のサイズはどう見ても三〇センチに近かった。だからたぶんその歩き方がアニメチックに感じられたのだろう。

「どうして母を覚えていたんですか？」

「こう見えて、女の趣味は悪くないほうなんだ」と店主は急にニタつきながらカップにコーヒーを注いだ。ぴったり二杯分の分量だった。きつと見た目よりきつちりした性格なのだ、と僕は確信した。「実はあなたのお母さんのファンなんだよ」と言い直し、店主はカップを差し出した。「この前もさ、蛍光灯を買いにきてくれたんだ。つい、おまけでヘソをサービスしちゃったよ。とにかく美人は得だね。うん」

そういえば、なかなかの美人だった母は地元のお店街の中年店主達に人気があった。八百屋のおやじは頼みもしないのにわざわざ自宅まで野菜を配達してくれたし、ケチで有名だった肉屋の旦那だって、いつも意図的に二〇グラムほど精肉の分量を増やしていた。どうしてそんな町じゅう

入れ、スイッチを押した。突っ立ったままでもいたら、「あんなはアンテナかい？ 屋根の上の」とからかわれたので、僕はカウンターの正面に置いてあった丸椅子に腰かけた。「こいつを売ってる人間がネスカフェを飲んだんじゃ、やつぱり拙いじゃないか」

店主はコーヒーメーカーの頭をポンポンと軽く叩いた。その振動でわずかに残っている店主の髪の毛がフワつとなびいた。まるでセルロイドの下敷きを腋わきでこすり、だれかに悪戯したときの髪の毛の立ち方みたいだった。

「ところでどこに住んでるの？」と店主は尋ねた。僕は住所を正確に教えた。店主は頷くと「苗字は？」と聞いた。

「足立ですが」と僕は名乗った。

「やつぱりそうか。青い瓦屋根の二階家だろ」

「なぜ知ってるんですか？ 気持ち悪いな」

「あなたとこ、去年テレビを買って替えたろう、アンテナ工事と一緒に」

たしかに店主が言い当てたとおり、前のテレビは画面の上下が極度に圧縮されて映りが急に悪くなり、チャンネルだつてガタついていて、仕方なく新品を買ったし、屋根の上のアンテナも台風がきたときに真つ二つに折れてしまつて、やむなく立て直していた。

「二つともうちで買ってもらったんだ。お得意様なのさ、あなたのお母さんは。さつきすぐに気づいたよ。実によく

の人氣者の女を粗末にする男がこの世には存在するのだろうか？ 世の中というやつはまったく不思議だ。

店主は「で、どうするの」と聞いてからコーヒーを啜った。再びちよつとだけ眼鏡がずり落ちた。アザラシみたいに白目がない黒目だけの丸い瞳が眼鏡の向こう側で光っている。「僕でよければ、お願いしていいですか？」と僕は本音を伝えた。いいよ、と店主は答えた。

「実は身元がしっかりしてる人間が欲しかったのさ。独り暮らしの子じゃ拙いんだ。その点、あなたなら安心だ。だれだつていいのなら、もうとつくに雇っていたさ」

何だか妙に嬉しかった。たぶん採用の決め手となった半分以上は美人の母のお蔭だと思うが、最初から自分を変わり者扱いしないでくれた店主の態度が素直に心にしみていた。でももしかしたら「どうやらこいつも俺と同類のようだな」と思われたのかもしれない。そういうことって、案外瞬時に分かりあえるものだ。これで少なくとも、煩わしい、いろんなことを少しは忘れられそうだ。

アルバイトの開始はたぶん明日からだろうと勝手に考えていたら、想像に反して「さっそく今日からはじめてよ」と店主に頼まれた。どうしてもその日のうちに済ましておきたい用事があるとのことだった。僕はただちに承知した。どうせ暇潰しに外に出てきたのだ。そのほうが俄都合がいい。

「五時をすぎたころに女房がくるから交代しなさい。それで今日のところは終了だ。女房にはその旨電話を入れておくから。いいよね、そういう手順で」

「それってもしかして、いきなり店番をしろ、っていう意味ですよ」

僕は半信半疑で念を押した。どこの世界にアルバイトをはじめたばかりの未成年の学生に店を任せるやつがいるのか、と不思議に思ったのだ。本当に変わった男だ。

「あんた、耳垢がいっぱい溜まってるのかい？」

当然じゃないかというふうな僕の疑問を店主は受け流した。それからクリアーフアイルに入った表のようなものをポンと放って寄越した。よく見ると、横軸にテレビとか冷蔵庫とかの製品名が記入され、縦軸には10とか25とかの何かの数字が書きこんであった。数字には赤と青の網がけが入っている。

「値引き率の表さ。どうしてもまけてくれっていうしつこい客がきたら、その表の青の網がかかっている数字の分だけ値引いて売っていい。けっこう値引けるもんだろ。でも安心しな、ちゃんと儲かるようになってるんだ。それでも客が納得しなかったら、仕方ない、赤のほうの数字で値引いて売っていいからさ。ま、せいぜい駆け引きを楽しむんだな」

面白そうだとは思ったが、「いいんですか、初日からそ

アルバイトの仕事内容は、奥さんからしばしば誘惑されたことを除外すれば、僕が想像していた範疇の中にすっぽりとおさまっていた。僕は店主と一緒に三日間つづけてアンテナ工事に出かけ、冷蔵庫とテレビを一日に一台ずつ運んで顧客の家に設置した。ちなみに店主が留守のときに、例の値引きも一度だけ体験した。「この冷蔵庫、まけてくれるかな」と要求してきた客に、青い色の網が入った10%引きを恐る恐る提示したら、あっさり承諾されてしまった。まるで面白くなかった。駆け引きを楽しむ間なんて、まったくなかったわけだ。

あれこれと雑多な仕事をこなしているうちに最低気温が三度ほど高くなり、桜の花の蕾が目立ってふくらんだ。四日目に奥さんから店では扱っていない外国製の電気カミソリをプレゼントされ（断り切れなかった）、五日目の朝には真冬に逆戻りしたような冷たい雨が降った。茉莉への手紙の返事はまだ書いていなかったし、父の不倫もつづいていた。それでも確実に春は近づいていた。

僕は店主と一緒にしょっちゅうアンテナ工事や配送に出かけた。そういうことが僕と店主の仲を思いがけず一気に深めることに繋がった。僕は店主に対してだけはなぜか心を開き、移動中の車内や休憩時間などを利用して、茉莉との間で起きてしまった微妙なすれ違いや、人と上手に関われない悩みなどを少しずつ打ち明けた。わずかな期間なの

れで？」と聞き返すと、店主は「いい、任せる」とだけこともなげに答えた。

「ほんとは商品の包み方も教えとかなきやいけないが、今日はもう時間がない。後日、じっくり伝授するよ」

店主は軽い口調で言い残すと、古びたカローラに乗ってすぐに出かけていった。たしかに五時ぴったり、奥さんが黒塗りの新車のセドリックに乗って予定どおりやってきた。奥さんはニタニタ笑いながら店に入ってくるなり、「いい子が見つかったって、主人、喜んでいたわよ」と僕に話しかけてきた。ずっと前からの知りあいだったかのように実に親しげな態度だった。奥さんは口角を吊り上げ、赤く塗った口紅をわざと強調させ、「足立君、君って、きつともてるでしょう。なかなかの美男子ね」と褒めてから僕をまじまじと見つめた。妙に色っぽく、三十を少しすぎているといった感じのかなり美人だったが、どうにも禿げ頭の夫とはつりあいが取れていなかった。だいいち歳が離れすぎている。

簡単に挨拶をして店を出ようとしたら、奥さんはバッグに入っていたインド林檎を取り出して僕の手握らせながら、「これ、高いのよ。明日から宜しくお願ひするわね」と微笑んで、長い睫毛をしばたかさせた。はじめて間近で見た、つけ睫毛だった。その瞬間、僕の全身に鳥肌が立った。

に、二人は雇用関係を越えて、すっかり気があっていた。あるいは店主に、僕は「理想的な幻の父親像」を付与していたのかもしれない。

そんなある日、アンテナ工事をするために屋根に登っていたら、僕は忘れかけていた茉莉のことを不意に思い出して、暗鬱な気分が包まれてしまった。かつて交換日記の中で、彼女は「あなたと一緒にロンドンにいけたらいいな。しっかりと勉強をして、シェークスピアのお芝居だつてい

っぱい観に行くのよ。どう？ 素敵でしょう」と書いていた。たしかに素敵なプランだ。「でも僕は英語が苦手だから」と返事を書くとき、「英語なんて簡単よ。一度外国に住んじやえば、だれだってしゃべれるようになるの」とどこか母親みたいなの、からかい口調の文章を彼女は送り返してきた。つきあい出した当初は大人びた中に少女趣味的な雰囲気をおわせ持つ茉莉が僕は明らかに好きだった。でも彼女が先天的に身につけていたプラス志向の姿勢のようなものがだんだん負担めて感じられるようになっていた。未成年のくせに煙草を吸う落ちこぼれと、優秀な女学生とじゃ、しよせん釣りあいが取れない。それに彼女の人生には、自らの進路を遮断する邪魔者がまったく存在していないのかのように僕には思えてもいた。

そんなふう感じた背景は、いろんなことを斜めに見てしまったり、あるいは悪く捉えてしまったりする性癖が僕

の体じゅうにしみついていたのが原因だろうと思う。そういうものは洗い流そうとしても、容易にできることじゃない。あくまで自分の属性なのだから、直したくても、簡単には直しようがないのだ。

そういう僕に気づいたのか、「アンテナの耐久性は、それを支える針金の張りが勝負なんだ。ちょっとでも張りが緩いと、わずかな風でも倒れちまうぞ」と店主は僕を諭した。

「やっぱり僕って暗いですか？」と正直に尋ねた。

「暗くはないが、ま、沈みがちっていうことはたしかだ。僕でよかつたら、また相談に乗るぞ。悩みを聞いてくれる男が君の家にはいないんだろ」と店主は真顔になった。

僕は驚いて店主の目を見つめた。「知ってたんだ……」

「あくまで下品な噂さ、商店街のオヤジ達の。気にするな。僕には子供がいない。だから君の話聞くのは、けっこう嬉しいんだ」

実は、と僕は父のことをすべて正直に語った。それで(少なくとも僕の側には)秘密めいた話はなくなった。店主は「不倫なんか世の常さ」と僕の背中を優しく叩いた。

「それに彼女のことも、あんまり複雑に考えると、かえって実態が分からなくなるぞ。まれに文学少女、普段は俗人。そう単純に考えたほうがラクになれる。違うかい？」

僕は唖った。まだ、そうは考えられない。

「どうやら不服みたいだな。じゃあ君は女や人に対して、

いる。僕が梅雨前線みたいに停滞しているうちに、時代は大きく移り変わろうとしていた。きつとそういう時代から自分を取り残されるんだろうな、と思えてならなかった。

車が市内に入ったところ、「色目で見つめられたらう？」

女房に」と店主が横目で僕を見ながら不意に聞いた。僕は返事をしなかった。たしかに奥さんから、しばしばそうされたけれど、正直に話していい内容とはどうい思えなかった。「いいんだ、気にしなくても。最初からそれもちゃんと計算に入っていたんだ」、店主は眼鏡の縁に手を添えながら、ちよつとだけ卑屈げに笑った。

「内緒の魂胆があったのか」と僕は呟いた。
ああ、と店主は言葉を切った。「僕にも君に打ち明けなければならぬ秘密がある。これから正直に話すから許してくれよな。……実は、あいつ、今浮気してるんだ。さつき販社で、かっぶくのいい中年男が我々に挨拶したろ。あいつがその浮気相手なのさ。二人とも僕が知らないって思ってるようだが、ちゃんと探偵に調べさせたから間違いない」

「浮気調査ですね」と僕は念を押した。
店主は同意した。「まだ若いあんたに、少しでもさ」

そこまで言ってから不意に口を閉じた。どこかで後悔しているような苦い表情だった。
「せめて気をそらしてもらえれば、ですか？」と僕はあえ

いったい何を求めているんだ？」

「求めるべき何かを求めているような。……よく分からないけど」と僕は口ごもった。

店主は「まるで禅問答だな」と困り顔で、大きな溜め息をついた。

それから数日後、商品の仕入れをするために店主と車で横浜の阪社に出かけた帰り道だった。「ま、女っていうやつは」といきなり店主が僕に話しかけてきたのだった。

「たしかに男を困惑させることで自分の存在価値を再確認しているきらいがあるよな。女の視点はもともと男とは違うのさ。分かりあうなんて、どうい無理なんだ。そうだろう？」

「それって奥さんですか？」

「当たり前じゃないか」と言い切って、店主はアクセルを大きく踏みこんだ。そのとたん、おんぼろカローラは苦しげにブルつと振動した。

「僕の女房こそ、まさに女そのものさ」

どう答えていいか分からなかったので、僕は流れ去っていく窓の外の風景を眺めていた。多摩丘陵の崖や丘がブルドーザーのシャベルで無慈悲に崩され、湿地が埋め立てられて風景がそれまで見たこともないほど無残に移り変わっていた。都会では新宿副都心の高層ビル化も着々と進んで

て聞いた。

「そういうことさ」

ひどいな、それじゃまるで人質じゃないか、と僕は頬をふくらましてもう一度窓の外を見た。ダンブカーが砂塵を上げて走り抜ける脇をセーラー服姿の女子高生が大勢歩いていた。なぜかどの顔も茉莉の顔に見えてしまった。

「悪かった。卑怯者だよな、僕は」

店主は僕に詫びると深く肩を落とした。

しばらくして、茉莉から催促の電話がかかってきたので、店主に事情を説明して午後から休みをもらい、僕は渋々彼女に会いに銀座に出かけた。店を出ようとしたら「いいか、とにかく気楽にな」と店主は優しく微笑んだ。

ほぼ一年ぶりの再会をはたした彼女は「お酒が飲みたい気分なの」と有無を言わず、僕をビアホールに連れていった。けれども彼女は「そんなつまらないことじゃなく」と僕に逆らうように、飼犬の話をしたり、お洒落の仕方を伝授したり、花言葉をクイズふうに質問したり(ちなみに、スマイレの花言葉は「小さな幸せ」だ)、思いつく限りのありとあらゆる、ごく日常的な話題ばかりをつぎつぎに口にしていった。現代詩好きだったかつての彼女の姿はやはりどこにもなかった。おそろく長い間、僕が勘違いをし

ていたのだろう。二人の間にできた溝は、どうやらもう埋まりそうになかった。

やがて茉莉は酔っぱらったみたいで、「パパとママは旅行に出かけていて留守なの」と眩き、ホテルの鍵を唐突に取り出した。僕は酩酊した彼女を抱えてホテルの部屋に入った。背中がきついと請われ、ブラジャーをはずしてあげると、意外なことに彼女はすぐに寝入ってしまった。僕は椅子に座り、彼女の寝顔を見つめたまま放心したように時間をすごした。その後の様々な場面が幾度も頭をよぎったが、僕の体は甲虫の黒い外皮のように、すっかり硬直していた。

いつの間にか僕も眠ってしまい、翌朝目覚めたときには、一枚の書き置きを残しただけで、すでに彼女の姿は消え去っていた。書き置きの背後には、白いレースのカーテンが僕の目を鋭く切り裂くように、ひたすら眩しく光っていた。たぶん彼女は僕と寝たかったのだろう。あるいは口惜しかったのだろうとも思う。もしかしたら酔っぱらった振りや、眠った振りをしていたのかもしれない。きつとそうだろう。そういう彼女の本心に当然僕は気づいていたし、事実何度もそうしようと迷った。でも酔った女の子に手を出すなどどうしてもできなかった。たとえ相手が望んでいたとしても。彼女の明確な意思を知りつつ、僕は自らの殻の中にももってしまった。あとほんのわずかなところの意思表示

と真つ二つにね」

店主は意を決めたように急に立ち上がると、「ついてこいよ」とだけ呟いて、僕を倉庫に連れていった。倉庫には卓球台ほどの大きさの作業台があり、様々な工具や自動梱包機も置かれていた。想像どおりよく整頓されている。「遅くなったが梱包の方法を今から伝授するぞ」と店主はいきなり宣言した。まるで何かの競技会の選手宣誓みたいだった。店主はひと呼吸入れると、表面がすべすべした紙の空箱と大きな無地の茶色い包装紙を作業台の上に載せた。君は以前数学が苦手だと嘆いていたよな」と聞かれたから僕は素直に頷いた。「いいか、」と店主は自慢めいた口調にわざと変えて顎をぐつと引いた。

「見えない一本の補助線を想定せよ。それが幾何学上達の極意である。はては人生という謎に満ちた厄介なものを上手に包みこむ強力な重要なファクターなのだ。ここまで分かるよね？」

僕は頭を強く振った。分かるわけがない。「ま、いいだろう」と答え、店主は箱を手持って語りはじめた。彼の語るところはこうだった。『立体は幾つかの面でできている。面はまた幾つかの線で成り立っている。この線の中に不敵な面構えをした見えない一本の線があり、その線、つまり補助線を中心軸にして——もちろん、ある想像の世界を生きることになるのだが——、立体を右に傾

ができなかった。頭の片隅には父が愛人と性交している歪んだ映像が浮かんでいた。僕は妙な気分のまま一人でホテルを出た。

朝の都会の路上では、鴉の集団を追い払いながらゴミを漁る労務者や、穢れた吐瀉物の痕跡や、急ぎ足で会社に向かう人々が、それぞれまるで無関係に交錯していた。空々しくはあるけれど、妙な活気に街は包まれていた。その朝、銀座のビルの大きなガラス扉に映し出された自分の青ざめた顔を僕は今でもはっきりと覚えている。『人を好むということと、上手に関わるということとは本質的に別物だ』と僕は思い知らされた気がした。公園にいつて水をガブ飲みしたけれど、いつまで経っても喉の渇きは癒えなかった。家には寄らず、そのまま店に出動すると、店主がすでに、いかに昨晩の首尾を知りたいかという顔つきで僕を待ち構えていた。僕は朝帰りした顛末を話したあと、手を大きく広げ「ホテルに書き置きだけを残して彼女は消えちゃいました」と告げた。

「で、何て書いてあったんだ？ その書き置きに」と店主は前のめりになって尋ねた。

『どうして何もしなかったの？ 私は望んでいたのに。意気地なし！』

そう言って、僕はやむなく苦笑いした。「ボールペンも書き置きの上で、見事にへし折られていましたよ。ポキッ

けたり（実際に紙の箱を傾けた）、左に倒したり（ちゃんど倒した）、上に吊り上げたり（軽々と持ち上げた）、下に寝転がせること（本当に寝転がせた）を正確無比な手順で繰り返すと、たちまちどんな怪しげな物体をも包み終えることができるのだ。そしてその見えない線が男と女のイタチごっこ（店主はたしかにそう言った）のうちに見えはじめたとき、僕は僕に不似あいな、若くて美しい女を、つまり今の奥さんを自分のものにしたのだ』

「分かったかね？」と店主は最後に尋ねた。紙の箱は見事な出来栄えで包み終わっていた。

「この方法を記憶せよ。そうすれば君はきつと人生を上手に包みこめるはずだ」

僕はすっかり感服していた。店主の存在が眩しく感じられた。店主は満足げに大きく頷いた。その拍子に眼鏡がずり落ち、例の禿げ上がった後頭部が見えてしまった。僕は不意に店主の奥さんの顔を思い出した。それから言わずもがな言葉——本当に言わずもがな言葉だった——をつい口に出してしまった。「その奥さんが何と今や」と。店主は放心したような虚ろな瞳で僕を見つめ、無念そうに頭を振った。そして乱暴な手つきでいきなり箱を両手でパン！ と押し潰した。ずり落ちた眼鏡の奥で涙が一筋光っていた。

店主の手順があまりにも見事だったことに嫉妬を覚え、

あるいは茉莉が残した書き置きの言葉で邪悪な気分になっていたから、からかい半分でつい口に出してしまった言葉だった。だが店主を深く傷つけてしまった。俺って何てやつなんだろうと、すぐに後悔した。店主は怒った顔で口を固く結んでいた。ついさつき見えはじめたような気になっていた補助線が僕の脇からすつと消えていった。

「ごめんなさい……」と僕は素直に謝った。いたたまれない気分ですっかり覆われていた。

店主は子供に対するように僕の頭をそつと撫でて、「君の言葉のほうが真実さ、気にするな」と僕を抱き寄せた。僕は店主の胸に、自分の頬を深く埋めてすすり泣いた。何だか本当の父親に抱かれているような気分だった。

結局、その後、僕が商品を梱包する機会は一度も訪れることはなかったが、その日の光景を今でも忘れたことがない。それ以来、僕はどこかでいつも人を傷つけている。たとえ悪気がなかったり無意識だったたりだとしても。

ほどなく日本武道館で大学の入学式が開かれた。式の冒頭で学長が訓辞をしようとした矢先、ヘルメット姿の過激派の連中が大挙して乱入してきた。学長は「君達、対話をしたまえ！」と険しい顔色で怒鳴った。リーダーと思われる男が「これがその答えだ！」と叫び、いきなり壇上に向かって火炎瓶を投げつけた。赤い火焰が勢よく立ち昇り、

しかしながら彼が僕の住所を知っていたことについてだけはいささか覚えがある。たえず他者を拒絶していた僕が、たまたま機嫌がよかった日に、わざわざ親切に教えてしまったからだ（やらなくてもいい余計な行動だ）。たしかに彼からは、その後何通も分厚い手紙をもらっていた。むしろ返事は書いていない。きつと彼は僕にその仕返しをしたかったのだろう。気紛れはしばしば人を損ねる。

僕は細かく破いて手紙をゴミ箱に捨てた。回送しようにも、自分にはできっこないなと思った。いくら考えたって、五人もの知人や友人を思い浮かべることはできなかった。実際に友達なんて一人もいなかった。たった一人だけいた彼女ともとづくに終わっていた。僕は、〈今さらどうして?〉と思いつながら茉莉のほうの手紙も開けた。

『あなたが求めているものは、どうやら私の中には見当たらないものようです』と彼女は書いていた。『私が求めているものは確実にここに存在しています。ただあなたに届かないだけで……。大きな欠落を抱えたまま私は旅立つことにします』と手紙は結ばれていた。僕はその手紙を『緋色の研究』の中にはさみこんでベッドに寝転んだ。あなたが求めているもの?』

翌朝、寝不足で鈍く痛む頭を抱えながら定時に店に行く、なぜかシャッターが降りたままだった。店主も奥さん

白地の垂れ幕が炎を上げながら、まるで悲鳴のように天井から舞い落ちていった。入学式はわずか五分で打ち切られ、そのまま秋まで大学の構内は封鎖されてしまった。ようやく受かった大学から、春はすつぽりと抜け落ちていた。

あつてなく終わってしまった入学式から自宅に戻ってくと、二通の封書が届いていた。一通は茉莉からで、もう一通はあの「黒縁」からだ。首を傾げながらもまず黒縁のほうの手紙を開封した。

『これと同じ文章で、あなたの友達五人に手紙を出してください。そうしないと、あなたに必ず不幸が訪れるでしょう』

何と「不幸の手紙」だった。

そのころ、そのような手紙を世間では「不幸の手紙」と呼んでいた。今ならさしずめチェーンメールに当たるものだろう。たしかにこの二つはよく似ている。だが「不幸の手紙」は決してメールではなかった。あくまで手紙だった。今の世の中と一緒で、どうやらその時分も、やり場のない不満や怒りを抱えている連中が少なからず存在していたらしく、その迷惑な手紙は妙なブームになっていた。常識的に考えれば「不幸の手紙」は匿名で投函されるべきものだ。それなのに彼がなぜあえて自分の名前を書いて手紙を出したのか? もしかして「不幸の手紙」の返事が欲しかったのか? まさか!

も何かの都合があつて店にくるのが遅れているのだろうか勝手に解釈し、合鍵を使って店の中に入った。店内にはやはりだれもいなかった。僕は竹箒を手表に出して掃除をはじめた。けれど何か妙な胸騒ぎがしていたのですぐに店の中に戻った。よくは分からないが、何かの気配のようなものがひっそりとした店内に漂っている。

きよろきよろしながら店の奥に進んでいった。急に何か僕を求めているような気がして歩幅が広がった。商品の陳列棚をくぐり、さらに奥に進んで倉庫の入り口までいった。確実にだれかの存在感を感じ取れた。だれかが倉庫にいる。間違いなくいるのだ。ドアノブを摘み右に回した。ドアが開いた。

いきなり目の前に二本の黒い脚がぶら下がっているのが見えた。脚は微動だにせず、ただ無為に天井から垂れ下がっていた。大きく黒い運動靴の像がさらに巨大になって僕を呑みこんでしまうかのように突如迫ってきた。僕は腰を抜き、壁に手をつきながらその場に崩れ落ちてしまった。その拍子にロープが首に巻きついている頭がほんの一瞬だけ見えた。薄い髪の後頭部が禿げ上がった頭だった。その足元には茶色い包装紙が敷かれ、黒いしみが、何かの禍根のようにこびりついていた。

駆けつけてきた警察の人から、自殺の原因は何だと思いか、と訊ねられたから「まるで思い当たりません」とだけ

答えた。遺書はなかったが、警察は自殺だと断定していた。本当は「奥さんが……」と伝えようと思ったが、確証のない話ではないからあえて黙っていた。

帰り道、坂を登っていると、あの日車窓から眺めた、移り変わっていく風景のことや店主が語った男と女のイタチごっこという言葉の語感が一気に蘇ってきた。補助線という言葉が頭に浮かび、ずり落ちた店主の眼鏡の奥で光っていた涙の鈍い光が、目の前で石榴の種子みたいに弾けていった。僕はそれまでに一度もなかつたくらい、たくさん涙を流しながら歩いた。たぶん自分が、「不幸の手紙」を回送しなかつたせいではないはずなのに、すっかり自責の念にかられていた。

通夜にも葬儀にも例の販社の中年男が参列していたし、奥さんは取り乱した様子もなく、たえず平然としていた。線香を手向けながら、何事も死ななかつたて、よかつたじやないか」と僕は呟いた。僕には男女の仲というものが、もうすっかり分からなくなっていた。

人の死に重いか軽いかの差異はないけれど、どうにか忘れてしまえる死と、いつまで経つても忘却できない死の違いくらいはあるのではないかと、ふと考えた。だれかが無性に欲しいとは思つたが、それがだれなのかまでは皆目分からなかつた。

本来なら回避できたはずのすれ違いがあり、結局その後

結婚してよね」と逆に問い返してきた。「とくに別れたさ。どうやら女房には僕の使う言葉が理解できなかつたみたいだ」と僕はわざと嘘をついた。しばらく世間話をしたあとで、「ところで、あの書き置き、ちゃんと読んでくれたんだよね」と彼女は首を傾げた。僕は曖昧に頷いた。嫌な話だつた。

「結局、捨てられたのは、あたしのほうね」と皮肉られたので「違うよ」と言い返した。「だつてそうじゃない。普通の人なら、あのままにはしないわ。違う？　そうでしょう。あの晩、あたし、待っていたのよ、あなたを。息を殺してずっと」、彼女は語気を強めた。

「だったら、なぜそうと」

「できるわけがなかつたでしょつ、そんなはしたない真似。これでもあたし、女の子だつたのよ」

彼女は言葉を乱暴に投げた。

別れ際に「この国ではね、出窓のガラスをいかに綺麗に磨けるかで、主婦の価値が決まるの」と笑い、彼女は自分のメールアドレスをメモに書いて渡してくれた。「どうせまた、なおざりにするんだらうけど、一応ね」と再び言葉を斜めに放りながら。

帰路の機内で、僕はあの日、ホテルのメモ用紙の上で、真つ二つにへし折られていたボールペンの像を思い浮かべた。あそこには、たとえばどんなかたちであれ茉莉の思いが

一度も会うことなく茉莉はイギリスに旅立っていった。その年の春、父は会社を勝手に辞め、全財産を抱えて愛人と一緒に失踪した。僕の家は無一文同然で家を追い出された。二人いた僕の父のうち、一人は自殺して店を廃業に追いこみ、もう一人は行方不明の身となつた。それ以来、何かの不幸が僕の背中にべつたりと張りついてしまった気がしてならない。勤めた会社はすべて倒産し、結婚（あの古典的病いだ）すら思つて、丸二年間働けない日々がつづいた。女性からは常に変人扱いされ、結婚もできなかった。人生を動かす装置に微妙な狂いが生じたのだらう。

茉莉とはその後、チューリップで有名なオランダのキューケンホフ公園で一度だけ偶然再会している。二人ともすでに三十代半ばになっていた。彼女は二人の息子を連れ、青い目のノッポな夫と四人で鯉（イリソ）を美味しそうに頬張っていた。ものすごく太っていたので、すぐには昔の彼女だとは気づかなかつた。だがとても幸せそうに見えた。二人が知りあいだと悟つた夫のはからいで僕らはベンチに座つて少しだけ話をした。

添乗員としてやってきたんだ、と説明すると、「旅行社に勤めたのね、偉いじゃない。じゃあ英語、しゃべれるんだ」と彼女は笑つた。首を振りながら、通訳がいるからと答え、「外交官にはなれたの？」と聞くと、彼女は「当然こめられていたはずだ。彼女の本心を僕は結局損ねてしまつたことになるのだらうか。応えようとすればできなかつたわけではないのに……。昔を思い出して胸がひどく圧迫されたので、僕はシェードを下げ、アイマスクをかけて目を閉じた。暗い視野の向こう側で、大きな靴をはいた両足が不安定なまま宙吊りになっていた。打ち消したくても、容易には打ち消せない黒い二本の脚の像だつた。

僕はアイマスクをはずし、キャビンアテンダントを呼ぶと、「お手数ですが」と言つて、茉莉からもらつたメモ用紙を掌の上で丸めて手渡した。それから再びシェードを上げた。小さく丸い窓の外は無情にも真つ青に晴れ渡っていた。どんな伝え方であれ、黒縁も茉莉も店主も僕を求めていたのだ。それがある種拒んだのは間違ひなくこの自分だ。そしてそういう自分だつて本当は人を求めていたのだ。

不幸の手紙ついでにたつて、ただの手紙じゃないか。だれだつてかまわなかつたんだ。とにかくただ回送すればよかっただけの話だ。そうすれば不幸を背負いこむことはないのだ。人はみんな黙つてそうするんだらう？　店主から教わつた『人生を豊かに包みこむはずの強力な補助線』は結局僕には見えなかつたんだな、と思わず苦笑いが出た。でもその店主にだつて、結局見えない線だつたのだ。「自死するような軟な人間の御宣託」では当てにならないのが道理なのか？　じゃあ、どうすれば人生を上手くやれるの

だ？

そう呟いたら、不意に冷たい涙が頬を伝った。機内では、あのベシヤンコに押し潰された空箱から、人知れずこぼれ出した寂寥の流砂が音もなく時間だけを刻みつづけていた。青春時代とは葬り去って然るべき時代のことなのだ。そうしないから、いつまで経っても楽になれないのだ。僕が辿りつくべき場所はいったどこにあるのだろうか？ そこにはどんな他者が待っていてくれるのだろうか。僕の目の奥に真つ青な空の色が焼きついて、容易には消えていかなかった。きつと茉莉は今でもせつせと出窓を磨きこんでいるだろう。おそらくそれが「幸せ」というものだ。僕はもう一度シェードを閉じた。

*

その後、どうにか立ち直ったが、人生を上手にすごすための方法を、僕はいまだに見つけ出していない。あまりにも遠い日々が不意に逆流してきて、今でも時折、僕は強いめまいを覚える。

受賞の言葉

室町 眞

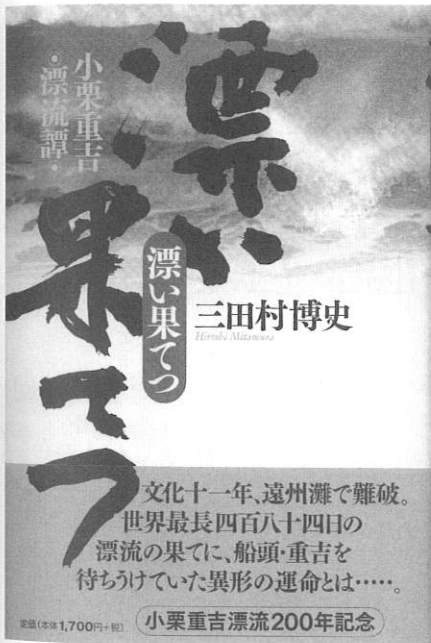
昨年の優秀賞に続く入賞。まして名誉ある「河林満賞」での受賞。しかも節目に当たる「第十回」と、今回は私にとって、まさにいいことづくめの銀華文学賞でした。

この賞には第三回の募集から八回連続で応募し続けてきました。最初のころは「老い」をテーマにした作品が多かったのですが、最近「青春小説」にいくらか近いものも手がけています。もともと、その舞台となる時代は六十年代の後半から七十年代の前半が中心で、「どうせ単なる昔話じゃないか」と、いささか厳しい批判を受けそうです。しかしながら、その時代に、まさしく青春を生きていた私には、あの混迷の時節が、ときおり強い磁力を放ちながら、ひしひしと迫ってきまします。

国内には大きな飢餓もなく、目立った対立構造も少なく、どこか、のつべりとした印象しか与えない現代を、そういうやや遠い過去から逆照射したら、きつと何かが浮かび上がってくるはずだ、という思いを受賞作には少しばかりこめたつもりです。今後、書き手の年代が若くなればなるほど、あの時代を描く人も少なくなっていくでしょう。そんなわけで、たぶん私達の世代しか書けない時代だろうから、今後も意識的にあのころのことを何作かに一本くら

お知らせ

次号文芸思潮55号は諸般の事情により、例年より一ヶ月遅く、4月25日の発売とさせていただきます。よろしく御了解の程お願い申し上げます。



いは書きこんでいこうかと思っっているこのごろです。

この度、特別の意味を持つ「河林満賞」をいただき、少なからず身がひき締まる気がしています。関係者の皆様、また河林満氏の御遺族の方々、本当にありがとうございます。



室町 眞

むろまち しん

1951 群馬県生まれ

76 法政大学文学部・日本文学科卒業
版下屋、海外旅行代理店に勤務しながら何篇か小説を書くものの中断。その後、講談社フェーマススクールズで、漫画家やイラストレーター志望の人々と面談をする、人材発掘業務を経験。そのことが大きな刺激となって、55歳で小説を再び書きはじめる。

2009 銀華文学賞優秀賞

10 長塚節文学賞優秀賞

12 銀華文学賞優秀賞 ほか



鎮遠自沈ならず

日本最初の戦艦となった清国軍艦

吉田満春

明治二十四年七月十日、人々の視線が遙か先の地平線に注がれていた。やがて、沖合に一条の煙がかすかに見え始めると、黒い煙が幾筋も立ち昇り、近づいてくる。見学する人々は爪先立って見ようと、膨れ上がった人の波が揺れた。全景が明瞭になると軍艦に特徴の艦橋がはっきりと現れた。清国北洋艦隊であった。北洋艦隊は五年前、長崎に來航しており、五百名の清国水兵が無断上陸し言葉の違いから、市内で暴れ、警察官、水兵とも八十人の死傷者を出した。人々は複雑な表情で見守っていた。

提督丁汝昌の旗艦「定遠」を先頭に、「鎮遠」「経遠」「来遠」「致遠」「靖遠」が続ぎ、港口に達するや、マストに日本国旗がいつせいに揚げられた。それを合図に二十一発の礼砲が横浜港内にいんいんと鳴り響き、日本側も答砲した。礼砲の煙が湾内に広がり、清国艦隊の艦影が砲煙に包まれ

て消えたように見えた。煙がはれると、清国軍艦の威容が浮かび上がった。驚きの声があがった。やがてざわめきに変わったそこには、威圧感からの怯えも混じっていた。明治維新を成し遂げた日本は、ペリー艦隊と同じ方法で、明治八年九月、江華島事件により朝鮮に開国を迫った。驚いた清国は、柵封国朝鮮を維持しようとして日本との対立が激しくなった。

北洋通商大臣李鴻章は、明治十三年、巨大艦建造を建議し、ドイツ・フルカン造船所に戦艦二隻を発注した。排水量七千二百トン、全長九十四メートル、当時最大の三十・五センチの連装砲二基（四門）を備え、厚い装甲で防禦された東洋最大の装甲艦が生まれた。高い乾舷の船首水面下には鋭い衝角があり、近接戦になれば相手の側面に突撃し、船腹を突き破って浸水、撃沈させる目的をもっている。高

いマストが艦の前後に配置され、前のマストには二段、後ろマストには一段の見張り台が設置され、四十七ミリ単装機砲二基、三十七ミリ五連装ガトリング砲八基が、水雷艇の奇襲攻撃用に遮蔽物のない高所に据えられている。

明治十八年に完成して天津に到着した巨艦は、遠いところ、すなわち外国を治め、鎮定する目的をもって「鎮遠」と命名された。

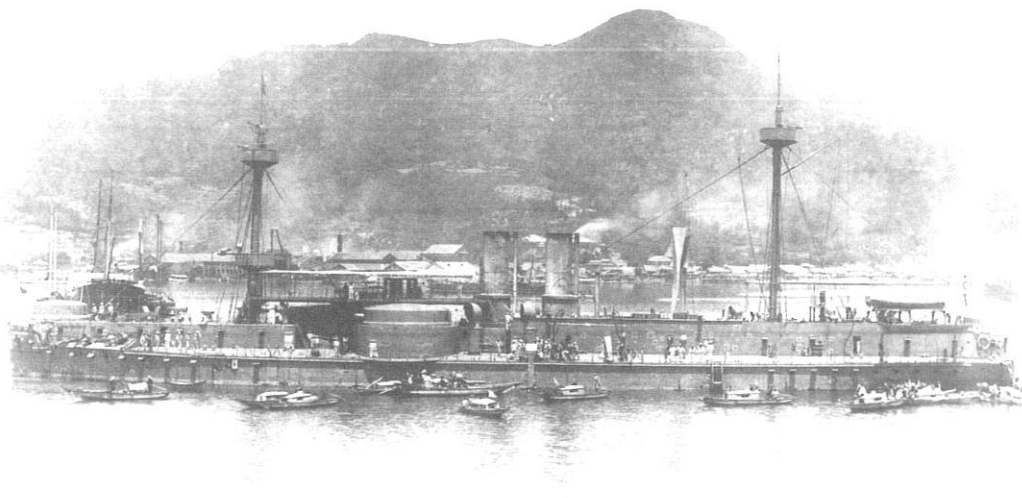
清国海軍は、西郷従道海軍大臣の招きで日本を訪問するもので、明治天皇が宮中に丁らを招き、清国北洋艦隊側も答礼として、十四日、両院議員、貴顕紳士、新聞記者を招いた。

勝海舟の感想は、

「今までナアニあのチャンチャン奴がと小馬鹿にしておったが、今日のあの威風堂々たるところを見ては、私は俄かにおっかなくなってきたよ」（明治二十四年七月十六日付・国民新聞）と、清国艦隊の威容を伝えた。日本の軍艦は清国の二分の一の大きさの扶桑である。

清国艦隊の訪問が間近に迫った七月三日の昼下がり、三田の福沢諭吉邸を訪れる者があった。

福沢の家からは東京湾が見渡される。福沢が創設した慶応義塾は明治十三年の経営危機を乗り切り、時事新報の創刊を遂げた。



清国戦艦「鎮遠」

書生から木札を受取った福沢は、一瞬嫌な顔を見せた。
(また、清海軍のことであろう)

福沢は、朝鮮・清国の開明を待つ時は過ぎた。両国には西洋人と同じ方法で対処するしかない、との考えを時事新報社説に掲載したことがあり、「脱亜論」と呼ばれた。

福沢は書生から手渡された木札を見ている。

「帝国海軍大尉・八代六郎」とある。

八代は、江戸末期の安政七年生まれで、松山六郎が本名である。父親の庄七は丹波郡桑田村(現在の愛知県犬山市)の地主で、水戸藩浪士・八代逸平の養子となった。父親は、六郎が政府の役人となることを願ったもので、明治十四年海軍兵学校八期生で卒業し、現在ウラジオストックに出張中の身分である。

着物に袴姿で現れた八代は軍人らしい生真面目さで、要件を簡潔に述べた。

福沢は承知して、書生に慶応義塾特待生という身分証明を渡すよう指示した。

「船は兵が動かして、初めて兵器となるのです。そのためには甲板の下に潜り込み、船室に入りその様子を観察したいのです。海軍の服装では入れませんが、学生であれば、迷ったといえれば問題は起きないでしょう」

「船室を見て分かりますか」

「戦となれば将と兵の一体の気が大事で、平生より艦長の

なく、ロシアですな」

「ただ味方がいれば別です」

「味方？」

「ハイ。味方です。日本と同盟を結ぶ国を得ることです」

「同盟……なるほどその手がありますか」

「まず清を破り、ロシアに備えなければなりません。そのためには、同盟する国が必要で、お考え願えませんでしょうか」

八代の顔は、穏やかな表情のままである。大津においてニコライ皇太子を傷つけ、ロシアと日本は開戦になるという流言が飛んだばかりである。

同盟という考えは福沢には意外であったし、新鮮であった。日本が独りアジアにおいて独歩しなければならない恐怖はある。

「貴殿は御幾つになられるか」

と聞くほどに気分が爽やかになっている。

「三十一です」

五十六歳になる福沢は、眩しげに海軍の士官の顔を見た。

日本は「定遠」の計画を睨み、明治十六年に、七二〇〇トンクラスの装甲艦の建造を計画したが、結局、明治十六年から二十三年までに三六〇〇トンクラスの「浪速」「高千穂」「叡傍」の三艦の拡張が一杯であった。

命令一下手足のごとく運動するを養っておるのです。それ故、兵の服装、艦の清掃、兵の動きを見れば分かります」
福沢は突然訪問した大柄で精悍な士官に好感を持ち始めている。

「ロシアは、二カ月前にシベリア鉄道の起工式を行いました。これによりロシアはウラジオストックのみならず、中国にも大規模な軍を運ぶことが可能となります。朝鮮及び支那はロシアの南下により、必ずや戦火が起ります」
「いつ頃鉄道は完成しますか」
「十五年後とみています」

福沢は沈黙した。

「日本海軍は勝ちますか」

「シベリア鉄道が完成するまでに、海軍の要望する艦を得て、やつと五分で、全部の艦が沈んでウラジオ艦隊を全滅できるだけです」

「もうひとつの艦隊は残っているのでは」

ロシアは本国にも艦を保有している。バルチック艦隊の母港リバウは、まだ建設されていない(一八九四年建設開始)。

「残念ながら、ロシア本国の艦隊を私は見ることはできません。わが海軍将兵は海の底にあるからです」

「そうですね……そうですね。勝てる訳はない。しかし、勝たねばならない……まさにロシアですな、清が相手では

日本は、清国と建造競争するには金がない。「定遠」クラスの軍艦を諦め、別の計画をもって補うしかない。

明治十九年、海軍省に「艦政局」を設け、建造構想を討議した。造船顧問として招聘した仏人エミール・ベルタンは、軍艦建造の指導の他、戦略戦術について意見を述べた。これを受けてベルタン設計・計画による軍艦整備を決定するのである。その方針とは、「鎮速」に対抗する大型艦を造るのではなく、四千トン級の海防艦を導入すべきとするもので、予算が少ない日本海軍は、次の建造方針を奏上した。

- 1 清国海軍の「定遠」型より大型の主砲を搭載。
- 2 速力は「定遠」型より二ノット優速。
- 3 一隻当りの建造費が一四〇万円以下。
- 4 明治二十二年中に完成。

そして三景観と呼ばれた、「松島・厳島・橋立」を柱とする建造計画が承認されたのである。

明治二十年二月、フランスのフォルジュ・エ・シヤンティエ社と「厳島」を、八月、「松島」を同社に発注した。ベルタンは、残る一艦は国内において製造すべきという方針のもとに、明治二十一年八月に横須賀海軍造船所で起工された。日本初の巡洋艦「秋津洲」の設計に際し、イギリス留学時にイギリス式の建造技術を学んでいた佐双左伸造(さふささのり)船大技監と衝突、フランス式を譲らないベルタンは去った。佐双は、速射砲を主兵器としかつ高速艦を主張した。この

後、フランス式からイギリス式に転換した要因は、明治十六年にイギリスに発注した巡洋艦「筑紫」、明治十九年発注の巡洋艦「浪速」「高千穂」が短期間の二十三カ月で出来たこと、機関技術の高評価が決定的であった。

清国海軍が去つて数日後、非公式の会合が品川沖に停泊する防護巡洋艦「高千穂」で開かれた。「高千穂」は今回の主催者山本権兵衛（海軍兵学校卒業年次二期・以下海兵卒とする）が一カ月前に艦長であった艦である。山本が海軍大臣西郷従道の下、海軍大臣官房主事に就いたことにより、私的会合は日本海軍の頭脳として働くのである。権兵衛と西郷の言い伝えがある。

権兵衛が、西郷に求められた報告書を提出すると、西郷は黙って返したという。

不思議に思つて聞くと、

「めくら判で押しもんで、おはんが好きにやいなさい」

権兵衛が、それはいけませんというのと、

「そのため、おいがい（いる）」

西郷は、海軍の将来を権兵衛に預け、自らは責任をとると明言したと。

この日、十名の海軍兵学校卒業者が集まっている。

清国艦隊の能力について、「鎮遠」の甲板下に潜り込んだ感想を八代大尉は述べた。

権兵衛は日本海軍の方針を述べ、欧米からの最新情報を集めるよう指示した。

権兵衛は、

「英国は清国から注文された『定遠』、『鎮遠』の建造をやらわりと断つたそう。英国は清国にドイツ・フルカンプ社を紹介し、日本には最新の艦艇を提供することにしたという情報を、オレはじかに英国将校団から何度も聞かされた。これはどういう意味か……、分かるか」

触れれば切れそうな権兵衛の目がある。

「英国は、ロシアに対抗する国が清国ではなく、日本を選んだということだ。清国の軍艦砲はすでに時代遅れであり、日本の砲には英国の名譽にかけて最高の砲を掲載させると」

権兵衛は日本海軍の技量は英国水兵に並び、兵器が優れておれば、日本海軍が勝利すると確信した言葉であった。

イギリスに発注した「吉野」は明治二十六年九月に竣工した。「吉野」は公式運転時に二十三ノットを記録し、定遠の十五ノットをはるかに凌駕する。さらにアームストロング社が開発した最新の十五センチ速射砲四門・十二センチ速射砲八門の搭載であった。「三景観」の主砲は一回の射撃に十分から一時間近くを要した。日本海軍は欧米の艦砲技術が大幅に進歩し、一分間に数発撃てる速射砲の存在を知り、イギリスのアームストロング社の十二センチ速射砲の採用を決定した。

「艦内の通路が雑然とし、水兵の挙動に覇気がなく、兵の軍紀が乱れていると思われる。我が海軍の士気の方が高く、砲術と艦隊運動を鍛錬すれば勝機はある」というと、

「清国海軍より速力を二ないし四ノット増す必要がある」

米国から帰ったばかりの斉藤実大尉（海兵六期）が発言した。

他の者からもほぼ同じ意見が述べられた。

八代は「鎮遠」の装甲について、

「確かに三〇〇ミリはあると思われるから、一撃で仕留めるのは困難であろうと思われる。砲撃では無理で、水雷による攻撃になる」

と発言した。海軍少佐上村彦之丞（海兵四期）は、

「われは、快速を活かして、相手の懐に飛び込む訓練をしている」というと、

「すると、肉を切つて骨を断つてすな」

と山下源太郎大尉（海兵十期）がいった。

「違う、肉を切つて骨を絶つた。命を絶つたの絶つた」

なるほど、という感想が洩れた。

「清国海軍に倣つて、一等戦艦を造る予算は我が海軍にはない」

権兵衛は参加者の顔を見渡した。

「造船費が安い装甲巡洋艦をもって、快速を活かし、中口径の速射砲で仕留める」

これにより多くの軍艦に中口径速射砲が搭載され、われは六十七門、清国は三門の搭載に過ぎない。日本海軍は欧米の最新式砲をもって「定遠」に対抗しようというのである。さらに、イギリスの最新式の測距儀を得て、「吉野」とともに秋山真之少尉（海兵十七期）が、明治二十七年三月に日本に着くであろう。それは清国との開戦の四カ月前であった。

日本の朝野を大いに寒からしめた北洋艦隊が母港の「威海衛」に着くと、提督丁汝昌は、天津にいる李鴻章のもとへ報告に行った。

天津は古くから軍事拠点の要衝とされ、隋の時代に二つの大運河が通され、交差点の「三会海口」がその発祥である。英仏連合に敗れた清は、天津条約（一八五八年）を結び、以来、天津は外交の窓口として開かれている。

李は地方長官の官職である直隸総督である。直隸省・河南省・山東省の三省の総督で、外国貿易の監督も行っていたから、北洋通商大臣を兼務するようになり、北京近辺を統括していたため、筆頭の地方長官とされている。

丁は日本の近況を報告し、艦隊の寄港が成功であったことを伝えた。

ところが、李鴻章の表情は晴れることなく、憂いが次第に色濃く漂っている。

「一体どうされたのか！」

丁は驚いて、李鴻章のひざ元まで進んで尋ねた。

この時、李鴻章は六十八歳の老人であつたし、丁も五十五歳であるから、清という大国の姿がこの二人を通して表われている景色でもある。日本は若く、例えると、獅子に向かつて吠える犬である。鬭争すれば獅子の鼻づらを咬むかもしれない。あるいは脚の骨を咬み砕く力があるかもしれない。……其の程度の存在である。だが、

「小さな犬が現れたからといって誰が氣にとめるだろうか、犬が狼であると大声で叫んでも、どこまで声が届くだろうか。丁よ、この国に公というものはかつて存在しない。あるのは私である。私のために国が起こり、……私のために国が亡び、民も私のために戦う。皇帝は民を食わせはしない。ただ、民の生活の邪魔さえしなければ生き残り榮える。清は皇帝のものである。だから清のものを皇帝に返すだけである。小さな犬のことを誰も真剣に考えない」

李鴻章は諧謔を言っているのであろうか。丁は硬性の氣概をもっていたから、反発するようには

「わたしには意味が分かりませんが」

と眉を吊り上げた。

「丁よ、北洋水師は誰のものか」

「……」

「お前のものでも、わしのものでもない、清のものである。

清は皇帝のものである。丁よ、頤和園が再開したのだ」

「アイヤー」

丁は茫然とするしかない。

頤和園は乾隆帝の時代（一七五〇年）から造られた巨大な人口園である。本格的に整備し、西太后の住まいも造るという。

広大な敷地に人造湖を造り、船を浮かべ、万寿山を造営するというもので、試算は銀三千万両である。清国の海軍予算は年額銀四百万両であつた。明治二十年にイギリス・アームストロング社が設計した防護巡洋艦「致遠」「靖遠」の二艦を受け取っただけで、清国海軍は新造船を中止しているのである。

さらに、日本に寄港した明治二十四年からは弾薬の購入さえやめたのである。銀三千万両は、およそ清国海軍の八年分にあたる。流用額は邦貨で三千万両以上になる。明治十三年に清国がドイツに発注した「定遠」は日本円で三百万円であつたから、十隻分に相当する巨大なものである。

しかし日本政府は戦争には慎重であつた。伊藤博文総理も元老山縣有朋も、

「清には勝てない」

と思っていたし、西郷従道海軍大臣ですら、

「北洋艦隊は優勢で開戦することに躊躇したり」と、外務次官の林董が記録している。他国の評価も清が優位であつた。

日清の戦いは、宣戦布告前の明治二十七年（一八九四年）七月二十五日の海戦により始まった。日本海軍の作戦方針は北洋艦隊との決戦と、黄海の制海権掌握にあつた。積極的に艦隊決戦を日本側が求めていたのに対して、李鴻章は北洋艦隊に対して戦力温存を命じていたため、海戦は起らない。

九月十七日、北洋艦隊は大孤山沖で広東水師と合同の戦鬭訓練を行っていた。

そこに同じ海域に向かった日本海軍が偶然会敵することになった。

北洋艦隊は「定遠」「鎮遠」の他主要艦十二隻の計十四隻、対する日本は旗艦「松島」を含む主要艦十隻であつた。互いに視認してから砲撃戦が始まるには、当時の船の速度は遅く、伊東連合艦隊長官は、昼食を命じ、ついで総員配置に付けたという。清国は七ノット（時速十三キロ）、日本は十四ノット平均であつたとされるから、戦鬭可能距離まで一時間もあつた。

北洋艦隊は当時の海戦の常識といわれた横列陣で砲撃しながら、日本軍の単縦陣に突き進んだ。旗艦「定遠」が

六千メートルで発砲を開始したが、この衝撃で司令塔内にいた丁汝昌は躓いて、しばらく指揮不能になつた。このため清国艦隊の足並みが乱れる中、「鎮遠」「定遠」の右翼に位置する「揚威」「超勇」に、八代が乗る第一遊撃隊は、敵右翼を包囲する形で運動しながら、一六〇〇メートルで速射砲を浴びせた。速射砲は艦上を掃射し、相手が応戦できないほど命中弾をあたえた。近接戦になれば主砲の出番はなく、清国軍は撃たれるだけであつた。

「超勇」に火災が発生沈没、「揚威」は損傷し避退した。「鎮遠」は、日本艦隊の後方にいた「比叡」に艦主下にある衝角でもって撃沈すべく突き進んだ。「比叡」は清国艦隊の間をすり抜け、脱出に成功した。

三時頃、本隊と合流した第一遊撃隊は、清国軍を挟撃することに成功、距離三七〇〇メートルに近づき砲火を浴びせた。旗艦「定遠」に火災が発生し、前部マストが折れた。信号旗を揚げるマストを失うことは指揮が行えない時代であるから、清国側は混乱し、「定遠」「鎮遠」と水雷艇の一団と、巡洋艦の一団に分かれ遁走した。

第一遊撃隊は巡洋艦の一団を追って、「経遠」を撃沈。本隊は「定遠」のグループを追ったが、「鎮遠」の三十五センチ砲弾が一発（二発という説もあり）旗艦「松島」に命中した。連合艦隊は清国側を追ったが、日没が近づいているため、午後六時三十分第一遊撃隊が戻ったところで、

戦闘を打ち切った。

清国海軍は「超勇」「致遠」「経遠」が沈没、「広甲」「揚威」が座礁、旅順に逃れた「定遠」「鎮遠」「来遠」は大損害を受け、残る「濟遠」「靖遠」「平遠」「広丙」も修理が必要で、戦闘可能な船は一隻もなかったのである。対して、日本海軍は「松島」「比叡」「赤城」と「西京丸」を除いて殆ど被害がないという結果であった。

主力の「定遠」「鎮遠」に一五九発、二二〇発の命中弾を与えたのは、速射砲の成果であった。

八代の「高千穂」は、被弾五発、死者一名という軽傷であった。

十月二十四日、北洋艦隊の拠点である旅順は、あつけない一日で陥落、清国艦隊はもうひとつの拠点「威海衛」に閉じこもった。

そこで、大本営は、陸海協同作戦を命令し、連合艦隊は港内の軍艦を攻撃、大山巖率いる陸軍は、威海衛の東にある榮城に上陸した。「鎮遠」の艦長林泰曾はこの時、すでにこの世にいない。林は威海衛の港口で誤って座礁させ、責任を取って自殺してしまったのである。「定遠」は、日本軍の水雷艇により航行不能となり、艦長は弾薬庫に火を放ち大破着底させ、拳銃で自決した。これを知った各艦長は、北洋水師旗艦となった「鎮遠」に座乗した丁汝昌のところに押しかけ、降伏を強要した。丁は最後まで戦うこと

日清戦争が終結するや、

「次の相手はロシアである」と明言し、

「ロシア軍艦を全滅させるためには、諸君と日本軍艦の半分は沈める覚悟である」

と語ったとされる。権衛兵は、海軍補充計画案を閣議に提出、その額二億円という天文学的数字は、当時の日本の予算総額九千万円からすればとてつもない金額であった。予算を管理する蔵相井上馨は、海軍大臣西郷従道に対して、

「冗談でしょ」と相手にしなかった。

「山本に説明に伺わせませう」と西郷はけろりとした顔であった。

権衛兵は西郷にいわれ、井上を大蔵省に訪ね、こんこんとなぜ三国干渉（ロシア・ドイツ・フランスにより清国より得た遼東半島を放棄した）を排除できなかったかを説いた。権衛兵は井上を釘づけにして席を立たせない。

「日本を護るだけの海軍力がないからで、将来かならずロシアと日本は闘う命運にあることは明らかで、その時まで日本に海軍力がなければ日本はロシアの属国になる他はなく、亡国となると」

「日本に金はない」

井上が抗弁すると、

「軍人は敵を壊滅する目標を持つ。それ故、相手に伍する戦備がなければ軍人は不必要であるばかりか、白旗を織つ

を主張したが、受け入れられず、ついに降伏を受け入れた。丁は乗務員の助命を条件とし、鎮遠の艦内で服毒自殺をとげた。

「鎮遠」以下、十隻の残存艦はすべて日本側に接取された。「鎮遠」は旅順で応急修理後、広瀬武夫（海兵十五期）が回航要員として、日本に運んで来た。広瀬が彼女（鎮遠）を遇することは尋常ではなかったというエピソードが伝えられている。鎮遠に乗り込むや、丁が服毒自殺を遂げたという部屋に訪れ、何ごとかつぶやいていたという。また、艦首に裝飾されていた龍の紋章を取り外すべきという意見が出た。

龍は清国皇帝の象徴である。

「おいおい、貴婦人にネックレスは必要ではないか」と。また、彼女の艦内清掃を指揮していた広瀬は些細なところも見逃さず、

「いいか、一番汚い所からやるもんだ」

といつて自ら爪で便器の汚れを擦り落としたという。広瀬はついに独身を通したが、日常の全てが軍務と捉えたような逸話である。

山本権兵衛は日本海軍の礎を作ったとされている。事実、日露の海戦において、連合艦隊司令長官に東郷平八郎を任命し、権兵衛の海軍計画により戦われたのである。

たほうが良いくらいです。海軍がなければ日本は滅びることとは閣下も御承知ではないでしょうか」

朝の十時から昼食も食べず、夕方五時まで、便所に行く時間を惜しむようにぶつ通してしゃべりまくった。井上は悲鳴をあげて、とうとう二億円の予算要求に「ウン」とうなずいてしまった。後に井上が側近に洩らした言葉が、

「いや海軍にはとほうもない押し奴がいたものだ」と料亭「小松」の女将小松刀自の証言がある（戸川幸夫・海戦より）。権衛兵は、清国からの賠償金二億両（邦貨三億円余）をそっくり海軍に向ける腹であった。

山本権衛兵は、西郷従道の推薦により、明治三十一年山縣内閣の海相に就任、日露戦争が終結するまでの八年間海軍トップとして君臨するのである。

その渾身の努力により帝国海軍はロシアと開戦する前の明治三十五年には、世界で第四位の艦艇保有数を遂げた。明治十三年から日露開戦までに海外に発注された十五万七千トンのうち、英国に発注したのは十三万七千トンで、実に八十七%である。英国の建造所の中なかでも、アームストロング社に限れば、六十三%で、諸外国にはない傾注である。これは、将来、英国との同盟も視野に入れた権衛兵の計画であったともいわれた。明治二十年に欧米視察に一年を費やした経験から、極東の日本に関心を寄せるための働きを積極的に続けた。日露戦争が始まるや、英国

はロシアに英国炭の輸出を停止、日本には優良な英国炭を供給した。英国炭は煤煙をあまり出さないため艦艇燃料に最適とされ、日本海軍の勝利のひとつに挙げる説もある。

バルチック艦隊の戦艦の船幅を知り、バルチック艦隊はスエズ運河を通ることができず、アフリカの喜望峯経由で日本海に来ることを見抜き、そのために費やす時間と燃費、疲労度を計算して東郷に伝えた慧眼でもあった。

明治三十五年（一九〇二）日露戦が迫ると、旅順港が日露戦の要であることは明らかであった。おりしも日英同盟が締結した年である。

八代らの旅順閉塞作戦を聞きつけたロシア帰りの広瀬武夫が、大きな身体を現した。広瀬に柔道を教授したのは八代であり秋山を引き合わせ、ロシア語を教えたのも八代である。

明治三十二年、帰朝を命じられた八代は広瀬に黙して、彼を推薦し、日本からの通知を得て、初めて打ち明けたのである。二人の濃厚な交流は、閉塞戦に広瀬が加わった記念品として八代に双眼鏡を贈ったことにも表れている。二回目の閉塞作戦にも広瀬が出ると聞いて八代は止めたが、広瀬は、第二回旅順閉塞戦で戦死する。

「広瀬は軍神となったが、……広瀬は常に予の身辺におる心地す。予は彼が死したるとは思えず」と記した八代である。

トを積んだ古い船は、速力も遅く、砲弾が当たれば入口まで辿りつけない。また、港口に敵の艦が潜んでいる場合も同じである」

有馬が閉塞作戦の目的が立たないことを広瀬に打ち明けると、

「鎮遠はどうですか」と広瀬は言った。

広瀬の一言に、八代は驚いたが、厳重な戦艦こそ最適ではないか。

「装甲は丈夫で、要塞砲が機関に命中しない限り沈むことはないでしょう。日本海軍の中砲では沈めることはできませんでしたから」

要塞砲を潜って湾内に辿りつくには大型の軍艦が最適である。旅順の水路幅が九十一メートルであることから、これに近い大きさの艦として九十四メートルの長さをもつ「鎮遠」を考えたのは自然であっただろう。これに、米西戦争の視察経験がある秋山がいて、ロシアから帰国中に旅順軍港を見た経験のある広瀬が加われば、要塞砲に囲まれた旅順にバラストを積んだ船で閉塞ができると考えるだろうか。成功を期すならば軍艦の自沈は議論の対象となつたはずである。

「そうだ！ 鎮遠だ！ どこにある」

八代は、愁眉を開いたおもいである。

鎮遠は、日本海軍最初の戦艦として艦隊に編入され、横

この閉塞作戦は、アメリカで観戦した秋山真之が提案したという説もあるが、艦の出口を塞ぐという案は当然の作戦であったから、様々な立場で意見が出たことであろう。

「つまり、港内の出入り口を塞ぐコルクを想像してみれば良い」

といったのは、有馬良橘（海兵十二期）であった。有馬は旅順港の実測を行っており、入口の幅が二七三メートル、大型艦が航行できる水路幅は九十一メートルと狭い。有馬は後、東郷平八郎の側近中となった人物である。有馬は、ロシアの帰りにウラジオストクから、ハルピンを経て旅順港を見た広瀬の意見を聞きかかった。広瀬は、旅順という軍港の形態に疑問をもったのは、ロシア海軍の専門家たちであったと、驚くべき情報を伝えた。

広瀬の情報は、「旅順は通過に困難で狭い出入り口を有し、ここに避難所を求める艦隊にとって罠になる。なぜなら封鎖が容易だから」というもので、さらに旅順からハルピンまで九百七十二キロメートルあり、防衛が困難である。そのような極東に防衛を強化することに疑問をもっているという。

「旅順港を守るために、ロシアは急いで要塞を強化しているが、まだ完成には到ってはない」と広瀬はいった。

有馬は、沿岸砲台の推定位置を示した。

「閉塞作戦の問題は、自沈させる船の種類にある。バラスト、須賀海軍工廠で修理と武装の更新をおこなっているはずである。」

「修理中ならなお都合がよい」八代がいうと、有馬は、秋山真之の顔をちらっと盗み見て、

「鎮遠の活用はわたしも考えたことがあります。しかし艦隊作戦には一隻でも戦艦が必要であると思うし、港湾に沈める案はどうでしょうか」

「戦速の遅い貨物船が、港湾奥深く辿り着くことが果たしてできるだろうか」

秋山は指摘し、閉塞作戦には否定的であった。平均速度八ノットの貨物船では、沿岸砲の射程距離から自沈までの距離に二十四分はかかる。しかも波がない状況である。

「だから鎮遠を使うのです」

広瀬は、戦艦であれば大荒れの気候でも使えるし、貨物船の遅い速力では要塞砲の餌食になることはあきらかであると主張した。「鎮遠」であれば十五分で湾口に到達できるといふ。後の閉塞作戦では風浪激しく操舵が困難になり、要塞砲が前進を妨げたのである。

「鎮遠ならば単独で作戦が可能です。水雷艇三隻が艦内にあり、ボートで逃げるより安全確実です。要塞砲の射程距離に入つた時点で、操舵を湾港に向け固定させて十五分で湾港を塞ぐ位置で自沈できる爆薬を装置し、九十一メートルの水路にうまく鎮遠を転舵できればよいのです」

「それは無理だ。要塞砲は各々連携しているから、もっと早くに捕捉され射撃されるのではないか」

有馬の意見である。

「有馬君、鎮遠に弾が当たっても沈まんよ」

八代は舷側の装甲の厚さを説明した。

「艦橋に当たろうが、沈まなければいいのだから」

一同は納得した。

「この際、戦艦を減らしてでも閉塞作戦に使うべく山本権兵衛さんに頼みましょう」

有馬は秋山真之に促した。後に秋山は、旅順閉塞作戦の参謀を務める。

「鎮遠は、開戦の劈頭に使うことで成否が別れる。一度だけで終わらせる作戦を考えるべきである」

広瀬の言葉に有馬は頷き、有馬は、

「鎮遠の水平装甲三五五ミリは、敵弾を跳ね返し、航路に到達した時点で、三十・五センチ砲四門を港湾に向け発する。爆薬を起動し、湾港に向け舵を取り、乗員は艦内水雷艇にて脱出。続く閉塞船は左右五隻をもって行う」との方針を決めた。

日本最初の戦艦を沈めることは、海軍省から反対が挙がることは明白であった。旅順港を囲むように要塞砲が外洋に向けられている以上、確実に閉塞作戦を成功に導くには戦艦の自沈もやむなしというのが、八代らの意見であった。

「仁録」として作っている。「成仁録」のメンバーは旗艦「三笠」の参謀であった松村菊勇大尉はじめ、海軍内部の有力な位置にあった。有馬は、

「固定防御の嚴重な旅順港に対して、時機が適切で実行者の決心が固ければ、旅順港閉塞作戦は、絶対に不可能なことではない」と同士に打ち明けている。

もし、バラストを積んだ輸送船などで行うと披露すれば、同士たちは実現不可能として有馬案は拒絶されたにちがいない。有馬がいう不可能なことではないという案こそ、「鎮遠」の閉塞戦投入であったろうし、軍令部への圧力を増すために、是が非でも仲間への支持が必要であったからこそ「成仁録」を作ったのである。

山本権兵衛から大役を任された連合艦隊司令長官東郷平八郎はこの閉塞作戦をどう見ていたか。東郷が旅順閉塞作戦に言及した記録が残されている。開戦二カ月前の明治三十六年十二月十五日、海軍軍令部長伊東祐亨は東郷に手紙をよせて東郷の意見を聞いた。このちようど十二月に、勅令第二九三号戦時大本營条例改訂により、これまで平時に限られていた海軍軍令部が、戦時でも軍令機関として機能し陸軍の参謀本部と対等の立場を得ていた。

この軍令部長の質問に対し、東郷の意見とは、旅順の艦隊を誘きだし、有利な海面を選んで決戦することが主目的であると、誘いに出ない場合は、つとめて威

広瀬が有馬の閉塞作戦に同意したのは、

「閉塞作戦をすばやく果たした後、ロシア司令官らと交渉し無駄な流血を避けるため旅順の明け渡しを求める心積りだった」と人に洩らし、

「同士を糾合して夙に計画を立て、有事の日を待てり」（日露戦争実記・旅順閉塞隊）のように「鎮遠」の閉塞作戦を信じていた。

明治三十六年、有馬良橋らは作戦案を軍令部に提出、作戦計画「機密一二〇号」となって採用された。開戦の前年であった。

有馬は戦後、有志を中心として閉塞作戦は九月に計画されたといい、伊集院軍令部次長の賛同を得て、極秘裏に進んだと残している。

九月といえば、開戦まで五カ月しかない。この閉塞作戦の経緯について有馬はほとんど語っていない。史談会記録という東京朝日新聞のやりとりには、有馬が閉塞作戦の責任者であったと山路中将が明言しているのに、有馬は否定している。このことは第三回目の閉塞作戦から、作戦主導が秋山に移ったためなのか釈然としない。有馬は、常備艦隊司令長官東郷平八郎の首席参謀、秋山が次席参謀に抜擢された十月以降には、東郷に閉塞作戦を報告しているはずである。

有馬は、閉塞作戦の同士名簿を、論語から名づけた「成力偵察を行ない敵を誘いだす。それでも出ない場合は陸軍に要請する。このようなことを繰り返せば敵もついには出てくるであろうと。廟議で開戦と決まれば、軍艦「豊橋」を旅順港に沈没せしめて敵の出口を塞ぐというようなものは奇策であろう、と述べている。

後に東郷は閉塞隊の危険な作戦に難を示したごとく語られているが、閉塞作戦に沈遠を使わないこと、自らの軍艦を港湾入口に沈めることなどの作戦内容変更にも無然とした思いであったのではないだろうか。バラストを積んだ貨物船では旅順港には辿りつけないと考えていたのは当然であった。

東郷の答えにはしかし不自然なものがあり、有馬や秋山の作戦具申を聞いていないような節がある。「鎮遠」を沈めるのではなく、味方の軍艦を沈めることに憤っている背後を感じる。密かに内容が変更されて、それに対して軍令部長からの諮問があったようにも取れる。

この内容変更には、何か重大なことがあったようで、有馬は「成仁録」に、

「司令長官に閉塞作戦のお許しを願ったけれど、どうしてもお許しがないから、時機到来まで待つてもらいたい。閉塞作戦以外にロシアに勝利することはできない。決してこの計画をあきらめたわけではない。お許しがあったら、いつでも応じられるよう、十二分の準備をしておいてくれ」

と残している。東郷は閉塞作戦そのものは伊東の手紙にあるように承認しているのである。決っている理由は作戦船の中身であつただろう。そしてこのことを、山本権兵衛はどう見ていたのか。

この時期は明治三十七年の正月とあり、開戦まで一月あまりでしかない。そのすぐ後に、報知新聞が外電として、「日本海軍では、軍艦鎮遠に石材を満載して、旅順港口を閉塞する作戦あり」の記事が報道され、有馬は驚いたとある。戦争の帰結を左右するこのような重大機密がどこから漏れたのか、暗然とした思いに襲われたにちがいない。

明治三十七年二月四日、御前会議はロシアとの開戦を決意、八日、東郷は主力の第一、第二艦隊をもって夜襲を行なった。ロシアの三隻に損害を与え、行動不能にした。

続いて、九日、ロシア艦隊の誘い出しを狙って、八千五百メートルの距離で砲撃したが、旅順艦隊は動かなかった。

そこで、東郷長官は閉塞作戦の実施を命令、有馬良橋中佐を隊長として、二月二十二日夕刻に出発した。広瀬武夫少佐の「報国丸」のみ出口に進入し自沈した。他の四隻は港外で撃沈、または自沈に終わった。戦死は一名である。

ロシアは日本海軍の意図に気付き、湾港の警備を強化した。閉塞作戦は、第三次作戦まで続き、第三次は十二隻の

このときにおいても、「鎮遠」を使えば、閉塞作戦は成功する可能性が高かった。この作戦には最初から「鎮遠」を使うことが計画されていた。三度の失敗もなく、広瀬少佐の戦死もなかった。陸軍の犠牲もなかった。なぜ「鎮遠」は使われなかったのか。

日露戦争を勝利に導いた立役者の一人山本権兵衛は、大正二年、内閣総理大臣に就任したが、翌年の一月二十二日夕刊に、「シーメンス贈賄事件」が報じられると、翌日、その内閣は議会で激しく糾弾された。

三月、山本権兵衛内閣は総辞職に至る。

次の内閣が大隈重信に内命すると、海軍大臣齋藤実まことは海軍学校二期下の八代六郎（第八期）を指名した。八代はこの時舞鶴鎮守府司令長官の任にあつた（五十三歳）。舞鶴鎮守府は、五十一歳で中将となった八代の最後の海軍生活となるはずであつた。思わぬ人選に海軍首脳陣は狼狽し、八代の海相受諾を阻止しようとして、新橋駅で待ち構えた。上京した八代は海軍側の裏をかいて、直接、尾張藩である同郷の高橋高明（立憲同志会総裁・外相・後の総理大臣）を訪れた。八代は海相受諾条件として、海軍兵学校卒の鈴木貫太郎（海兵十四期）、秋山真之（海兵十七期）の名をあげた。

八代はさっそく秋山真之を大臣室に呼んだ。秋山は鈴木

閉塞船を動員したが、最大の犠牲を払い失敗した。この頃、八代は浅間艦長として、広瀬の戦死を聞くしかなかった。このとき戦艦「鎮遠」は日清戦争に参加した「松島」「敷島」「橋立」の三景観組と共に第五戦隊に組み入れられていたのである。

海軍の目標は、旅順艦隊を壊滅し、回航するバルチック艦隊と決戦することである。そのために旅順攻略を行ったのだが、結果は、二月上旬の旅順港奇襲作戦の失敗、出てこないロシア艦隊を封じる閉塞作戦を二月、三月、五月と行なつて失敗し、港外からの間接射撃も効果なく、機雷敷設に切り替えるも、ロシアの機雷によりなげなしの戦艦二隻を失った。

ここに至り、七月十二日、大本営会議において、海軍は旅順攻略を正式に陸軍に要請することとなった。

バルチック艦隊が回航する時期まで、敵は港内に居座っている。港外に出てこない以上、陸から追い出してもらうしかない。バルチック艦隊と合流して日本艦隊との戦いになり、敗北した場合、日本海の海上権は失われ、陸軍は遼東半島に置き去りになると。これまで、海軍幕僚の口から、旅順は海軍独力で行うとし、陸軍の提案を拒絶していた経緯がある。海軍が旅順閉塞作戦に消極的であつたのは、港外におびき出せば、陸軍の協力は必要ないと海軍幕僚が考えたためである。しかし時間がなくなっていた。

貫太郎少将を海軍次官に推薦し、衆議院の法務委員会で「陸海軍治罪改正」を検討中の故、軍務局長の留任を希望した。「今回のシーメンス事件は陸軍が裏で策謀していることは明らかで、山縣（有朋）閣下が海軍の軍備拡張に反発しているため起きたものです」

秋山は情勢を読んだ。

「馬蹄銀事件のことは覚えておられますか」

身を乗り出すようにたずねた。

「おおよそなら」

八代は煙草に火を点けながら応えた。

馬蹄銀事件は、明治三十三年（一九〇〇年）に起こった義和団事件に出兵した日本軍が、二百九十一万両の馬蹄銀を横領したというものである。

「しかし、あの金は見つからなかったはずだ」

八代はこもった声でたずねた。

「横流しした馬蹄銀を隠すのに最適な場所が、日本にあつたのです」

「……」

「鎮遠ですよ」

「まさか」

八代は黒く大きな穴を覗いた気持ちになった。

「そのまさかです。我々が閉塞作戦を練っている間、馬蹄銀は鎮遠の奥に隠され、頃合を見て移動したのです」

「情報元は」

八代は声が震えた。そんなもので、広瀬が死んでたまるかと思つた。

「司法省です」

秋山は八代の目をみすえながら、

「陸軍が、検事総長を通して、閣下に伝えていゝるんです。

義和団事件時の『鎮遠』艦長は梨羽時起大佐です。鍋木大佐が艦長となるまで鎮遠の所属は二年の間空白です。梨羽大佐は海軍首脳の指示で陸軍に仲介したと思います」

少将になつた梨羽は、東郷率いる連合艦隊の第一戦隊司令官として旅順の封鎖戦に従事していたが、五月十五日、初瀬、八島の戦艦二艦を触雷により失つた責任者である。

「戦艦六隻のうちの二隻を沈めても東郷さんは何もいわなかつたな」

「そうです、日本海軍は、新式の戦艦を失つたにもかかわらず」

「秋山、お主は何が知りたいのだ」

「権兵衛は知つていたということです。おそらく陸軍の山縣有明閣下から協力を申し込まれたと思われます。条件として海軍に軍令部の独立を与えるという内諾があつたのでしょうか」

「ところで、馬蹄銀を隠すために鎮遠が使われたとして、その証拠はあるのか」

「一連の事件を山縣閣下に結びつけるとカラクリが明らかになります。しかし確証はありませんが、閣下は、『萬朝報』

紙で馬蹄銀事件を暴いた幸徳秋水を捕えさせ（一九一〇年六月）、翌年の一月には死刑を執行しました。今回のシーメンス事件の検事小原直は、幸徳事件の検事でもあります。

陸軍と検察官は協力関係にあり、海軍は出遅れているのです。鎮遠は幸徳が処刑された年の四月に除籍、十一月に装甲巡洋艦鞍馬の標的となつて破壊されています」

「何！」

「陸軍の要請により鎮遠に施した証拠を隠滅するためと思われます」

「どんな証拠だ」

「隠し倉庫のような……幸徳は鎮遠が隠匿に使われたと検事に話したのでしよう。つまり陸海軍のいずれかに内通者がいたということですよ」

「それで、処刑を急いだというのか？ 俄かには信じられないな」

「証拠があつても、すべて消えてしまいましたから」

八代は口に砂が入つたような気持ちになつた。

「もうひとつ、これは自分にも閣下にも言われている笑話です。お聞きになられますか。もし、鎮遠を閉塞作戦に参加させたならば旅順港は封鎖され、陸軍は旅順要塞には少数で当り、疲れるのを待ちながら、乃木第三軍を加えて、

奉天に怒涛の進撃をしていたであろうと。反して、海軍は、旅順港の封鎖と、ウラジオストックへの圧力を強めるだけで、することはなくなつたというものです。ご承知のようにバルチック艦隊は十月十五日にリバウ港を出て、翌年の五月二十七日に日本艦隊とま見えるのですが、旅順とウラジオ港が使えないと知つたロシアは、バルチック艦隊を日本に向けてしょうか。石炭の積み出しができない港に向かう艦隊はありません。実際には旅順が陥落した一月には、バルチック艦隊はノシベにいて、艦隊の合流を待っていたのです。それでも彼らが日本に向かう動機は、ウラジオストックが無事であつたからです」

「そうかもしれないな」

八代は笑うしかない。

参謀本部は明治三十六年までは陸軍が戦時において海軍の軍令を統括していたため、大山巖陸軍大将が参謀総長であつた。日露開戦で大山は満州軍総司令官に、山縣が参謀総長に就任する。

八代は、鎮遠の閉塞作戦の中止は、海軍軍令部の反対と考えていた。馬蹄銀が開戦直前まで鎮遠に隠されていたとすれば、旅順閉塞作戦に鎮遠が使われるという情報は陸軍首脳を慌てさせたに違いないと思つた。陸軍は、対露戦に忙殺され、海軍からの要請にもかかわらず、銀塊の受け取りが何らかの事情で延ばし延ばしになり、開戦の年まで鎮

遠のどこかに隠されたままになつていたのであろう。海軍は「鎮遠」を旅順閉塞作戦に投入するという案を伝え、決る陸軍に引き取らせる期限を迫つたのである。とりわけ鎮遠の内部を知る広瀬海軍軍人に見られぬうちに処理することが話し合われたであろう。

（もし、鎮遠が閉塞作戦に投入されたら、鎮遠の内部を知つている広瀬は、内部をくまなく点検し、些細な変更も見逃さなかつただろう）

と八代は思いながら、

「鎮遠自沈ならずか」とつぶやいた。

戦争は結果により定まる。山本権兵衛は何も言っていないが、「鎮遠」を、陸軍の隠し金庫として役立たせることで、陸海軍の融和に動いたとも思える。今回のシーメンス事件は、陸軍からリークされ、海軍は苦境に立つていゝるようでも、同じ軍隊として攻めたり、抑えたりするのだからと八代は思つた。

八代は果敢に海軍閥の解体を行い、前首相山本権兵衛大将、前海軍大臣齋藤実を予備役とし海軍を去らせた。国民の海軍に対する世論は好転、海軍拡張計画も通過成立した。シーメンス事件の真相の動きは、七月、第一次世界大戦が勃発すると、にわか戦争景気により事件は忘れ去られた。

八代は真つ先にドイツへの宣戦布告に賛成した。

受賞の言葉

吉田満春

旅順閉塞作戦を調べると、鎮遠を使うというアイデアが当時もあったようだ。ようだというのは単に案として出ただけで、その後具体的に検討した痕がない。作戦はとんでもないアイデアから生まれるもので、実現しないものなどはいえない。例えば、真珠湾攻撃も、神風特攻も、戦艦大和の特攻しかりである。

とすれば、鎮遠自沈も実行される可能性はあったと思う。第一次閉塞戦にわずか五隻のバラスト船を使う作戦はいかにもお粗末である。閉塞作戦のどこに成功の可能性があるのか見つけられない。やはり当初は綿密な計画があったと考えるのだが。

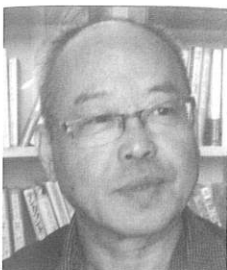
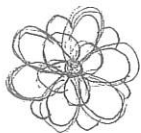
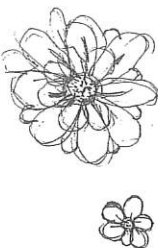
難しい作品に光を与えて下さったのはありがたい。題材からして、厳しい評価になると思った。感謝したい。

注*

*清国の賠償金は三億四四〇五万円となった。追加金は遼東半島還付金として得た（大江志夫著）。
*馬蹄銀・日本名である。馬の蹄の形からきている。中国の銀貨。一両三十七g、五十兩一八六五g。銀の塊。二〇一二年の銀の価格九十一円（二十四銭（二グラム））として、九十八億円に相当する。ヤフーオークションでは五十兩の馬蹄銀は四十六万円の値段。

よしだ みつはる

- 1952 北海道室蘭市生まれ
- 明治学院大卒
- シドニーに遊学後勤める
- 89 会社経営
- 2008 千葉山武市に移転
- 11 第8回銀華文学賞歴史小説賞「幻の松尾城」佳作
- 12 第9回銀華文学賞歴史小説賞「榎本武揚と手袋」優秀賞
- 13 特選小説5月号「岬の記憶」
- 地域雑誌「燦夢の詩」編集長
- 山武市教育委員会編集委員
- 山武市役所広報編集委員
- NPO九十九里広域活性化事務局員



吉田満春

書評

「シエルター」発 八覚正大著

生身の教育からの小説

著者・八覚正大は小説家であり、詩人であり、教育者である。それらが一体となってきたのが、まさに本書と云っていいだろう。

数学教師を定年退職するにあたり、著者は、「人間関係のもっとも大切な『生身の直面体験』を数多くこなしてきた教師が、その体験を経験として『ことば化』しないまま、教員人生を、さらには本体の人生を終えてしまう事実」につきあたる。新聞や雑誌で取り上げられる学校に関する記事の多くは「事件」として報じられ、それ以前に教師が死に物狂いで生徒と関わり解決した事例はなかったかのように扱われる。実はそこにこそ、いま学校で何が起きているのか、その神髄があるのに――。

本書の底に横た

わっているのはその
思いであろう。不登
校生徒と出勤拒否教
師の心の居場所を描
いた『シエルター』
発、オートバイ事

故死生徒へのレクイエムである「零度の遊び」は、いまの「学校」がどういう場所であるかを、生身の肉体が触れるように読者に直に感じさせる力を持っている。教育評論家では書けない、まさに小説家ならではの視点だろう。

現場にいるのはでき上がった人間である教師と、教えを受けるべき劣った生徒ではないのである。同等の人間が同等の立場で対峙している。そのことを知った教師が本音でぶつからないかぎり「教育」などできはしないのだということが、本書を読むとよく伝わってくる。

また、「学校」の抱える矛盾を知りぬいた著者は、その現場を描くだけにとどまらない。物語の力でなんとか現実を動かせないか、そう考えて、自分の関わった事例を下敷きにした「いじめ手技治療団」を書き、現実に「関係修復協会」なる団体を立ち上げて、「関わりあった者どうしの一期一会の命を励ましあい支え」合おうと活動をはじめるのである。本書の最後に収められた詩「関係修復協会」は、その設立趣旨宣言ともいえそうである。

「教師と名のつく者よ！ 教職を経験した者よ。未来の子どもたちのために、己の現場体験を掘り起こし、『まなざし』と『ことば』と、時に『手』を現場教育にじかに差し伸べてみる勇気を、取り戻してみないか、元教師と名のつく者よ！」――「あとがき」にある著者の呼びかけが説得力をもつて心に迫る一冊である。

(小沢美智恵)

小説集 「シエルター」発

八覚正大

学校現場のリアルを生
ききぬくために
どうしても文学が必要だ